

# 西朋24

西朋登高会

# 西朋24

## 西朋登高会

### - 目次 -

山行総覧	3
山行記録	
1987年度	7
1988年度	19
1989年度	31
西高ワングル部活動報告	57
西朋登高会会則	59

<< 1987年度山行総覧 >>

山行 NO.	期日	山行名	パーティ
8701	4/29	日和田山R C T	山田、萩田、斎藤、中村
8702	5/3~5	北アルプス雪倉S T	中野、河合、山田、中村
8703	5/3~5	八甲田 大岳、岩木山S T	西人 他1
8704	5/23	上越 朝日岳~清水峠	山田 他2
8705	5/31	滝子沢右俣	河合 宮崎 山田
8706	6/13~14	大洞川 井戸沢~荒沢谷下降	河合 山田 斎藤
8707	6/28	笛吹川 東沢 鷓冠谷左俣	上野 斎藤 中野
8708	7/12	西丹沢 中川 箱根屋沢	中野 山田 上野 斎藤
8709	8/9~12	北アルプス 岩井谷~上ノ廊下下降	河合 宮崎 山田 上野 斎藤 鈴木
8710	8/9~12	北アルプス 雲ノ平~双六岳	吉田 他3
8711	8/10~11	奥武蔵ハラモ沢、冠岩沢	青谷 他1
8712	8/13~15	南アルプス明神谷	青谷 中野 中村
8713	8/29~30	西朋祭 氷川キャンプ場 日原本流	渡辺 青谷 河合 江沢 萩田 山田 吉田 鈴木
8714	8/23	越後 巻機山 幻沢	山田 他3
8715	9/13	西丹沢 小川谷廊下	河合 萩田 浜田 山田 吉田 鈴木
8716	9/13	恵那山	西人 他2
8717	9/15	富士山	青谷 他
8718	9/19~20	上越 湯檜曾川本流	上野 斎藤
8719	9/20	魚野川 荒沢本谷	山田 他3
8720	9/20	奥多摩 逆川	吉田 萩田 他1
8721	10/10~11	皇海山 小田倉沢	上野 斎藤
8722	10/11	越後 巻機山 米子沢	山田 他3
8723	10/25	西上州 兜岩山	河合 山田 吉田 斎藤
8724	11/28~29	富士山雪訓	山田 三宅 上野 斎藤
8725	11/28~1/4	南アルプス 赤石岳~聖岳~上河内岳	山田 三宅 上野
8726	1/4~5	八ヶ岳 ジョウゴ沢、峰ノ松目沢	青谷 斎藤
8727	2/7	足尾 松木沢 黒沢	青谷 山田 吉田 三宅
8728	2/14~15	信越 四阿山~万座温泉	山田 西入
8729	2/21	越後 巻機山	山田 他5

<<1988年度山行総覧>>

山行 NO.	期日	山行名	パーティ
8801	4/29	日和田山RCT	荻田 吉田 額賀 内倉 新倉
8802	4/29~5/1	双六岳スキー	山田 他2
8803	5/5	広沢寺RCT	山田 他1
8804	6/11	日和田山RCT	山田 額賀 新倉
8805	7/3	奥秩父 東沢ノナメ沢	青谷 三宅 山田 額賀
8806	8/4	奥武蔵 浦山川 細久保谷 左俣	青谷
8807	8/9~17	夏合宿 双六岳~黒部源流~東沢下降	山田 額賀
8808	8/22	北丹沢 早戸川 本間沢	吉田 額賀
8809	8/31~9/2	南ア 野呂川 扇沢~北岳~荒川本流	上野 額賀
8810	9/23~25	北ア 北鎌尾根	吉田 山田 三宅
8811	10/1~3	東北 栗駒山 産女川	青谷 他1
8812	10/9~10	谷川岳 ヒツゴ沢 鷹巣C沢	上野 額賀 三宅
8813	10/16	丹沢 水無川本谷	額賀 他2
8814	11/12	日和田山RCT	額賀 他1
8815	11/26~27	御嶽山 雪訓	山田 額賀 内倉
8816	12/30~1/1	南ア 塩見岳	山田 他1
8817	12/29~1/1	中ア 正沢川 幸ノ川~木曾駒ヶ岳	青谷 三宅 額賀
8818	1/6	西上州 入山川谷急裏谷IC	上野 額賀
8819	2/5	信越 根子岳~四阿山	青谷 額賀
8820	3/9~16	道南 ニセコアンヌプリ山 羊蹄山5号目	額賀
8821	3/14~17	道央 芦別岳	吉田 山田
8822	3/28~30	道東 知床海別岳 知床峠越え	青谷

<<1989年度 山行総覧>>

NO. 1

山行 NO.	期日	山行名	パーティ
8901	4/8~9	西上州 荒船山	額賀 他3
8902	4/10~11	雲取山	高橋
8903	4/22	鷹取山RCT	額賀 新倉
8904	4/29	日和田山RCT	青谷 上野 額賀 新倉 高橋
8905	4/29	宮崎 大崩山	山田 他1
8906	4/30	日和田山RCT	額賀 新倉 他1
8907	5/2~4	会津駒ヶ岳~燧ヶ岳ST	上野 額賀 高橋
8908	5/13~14	白馬大雪渓ST	青谷 額賀
8909	5/14	九重山	山田 他多
8910	5/25~28	雪上技術講習会 立山剣沢	額賀
8911	6/3	日和田山FCT	額賀 他3
8912	6/4	両神山 金山沢 右俣廻行 左俣下降 /双子山中央稜	吉田 額賀
8913	6/26	鷹取山FCT	額賀 他3
8914	6/27	日和田山FCT	額賀 他3
8915	6/30	川苔谷 逆川	額賀
8916	7/2	笛吹川ヌク沢左俣右沢	上野 額賀
8917	7/27	乗鞍岳	内倉 高橋
8918	7/27~30	妙高山・火打山	笠原 松原
8919	8/4	日原川 鷹ノ巣谷	額賀 他1
8920	8/13	開聞岳	上野
8921	8/13~16	飯豊連峰	笠原 松原
8922	8/13	穂高たたみ岩 滝谷第三尾根~ドーム中央稜	山田 他1
8923	8/14~19	夏合宿 屋久島 瀬切川	青谷 上野 額賀
8924	8/19~20	会津駒ヶ岳 下ノ沢	遠藤 吉田
8925	8/25~27	白峰三山	高橋 他2
8926	8/20~21	開聞岳/霧島韓国岳	額賀
8927	9/2~3	妙高山	高橋
8928	9/29~30	赤岳/阿弥陀岳	笠原 他1
8929	10/1	鷹取山FCT	額賀 他1

山行 NO.	期日	山行名	パーティ
8930	10/8~10	外山沢緑沢~奥白根山徒走	青谷 額賀
8931	10/14~15	南大菩薩	高橋
8932	10/15	鷹取山FCT	額賀 他1
8933	10/29	葛葉川本谷廻行ヒゴノ沢下降	額賀 他1
8934	11/4~5	丹沢	高橋
8935	11/18	表妙義	吉田 他4
8936	11/25~26	戸隠連峰 西岳P1尾根	上野 額賀 他1
8937	12/2	水川屏風岩RCT	額賀 他1
8938	12/3~4	北ア唐松岳	額賀 他5
8939	12/9~10	雪訓 阿弥陀岳南稜	
		／裏同心ルンゼIC	青谷 額賀 内倉 高橋
8940	12/26	鷹取山FCT	額賀 ~
8941	12/28	鷹取山FCT	額賀
8942	12/31~1/2	冬合宿 海谷駒ヶ岳ST中退	山田 上野 額賀 高橋
8943	1/3	鷹取山FCT	額賀
8944	1/5	鷹取山FCT	額賀
8945	1/14~15	伊豆天城山	額賀 他1
8946	1/28	西丹沢 沖ノ箱根沢IC	上野 額賀
8947	2/3~4	美ヶ原ST	額賀 他2
8948	2/3~4	白駒池ST	高橋
8949	2/18	御坂濁川IC敗退	
		／三ツ峠コウモリ沢IC中退	青谷 上野 額賀
8950	3/3~4	大渚山~姫川温泉ST	上野 額賀 高橋
8951	3/11	前武尊~沖武尊山ST	青谷 額賀 高橋
8952	3/17~18	会津駒ヶ岳	山田 他2
8953	3/25	鷹取山FCT	額賀
8954	3/31~1	白馬乗鞍ST	渡辺 他5

# 1987年度山行記録

## 1987年度役員

会長	山野裕
チーフ・リーダー	青谷知己
学生リーダー	山田裕久
西高係	荻田哲也
	上野午良
会計	中野敏彦
	吉田浩之
例会	中村兼一
記録・会報	鈴木学
	渡辺喜仁
装備	山田裕久

## 8702 北アルプス

### 雪倉岳スキーツアー

5/3~5 中野・河合・山田・中村

3日 榑池のスキー場から蓮華温泉に向かう。天狗原まではずっと登り、そこから温泉までは7百メートルの滑降。荷を背負った身には少々辛い。

4日 融けかけた瀬戸川のスノーブリッジを渡ると、雪倉岳への登りが始まる。雪倉の滝を巻き、一段と傾斜の増した斜面を登る。山頂に着くとガスがかかり展望は悪い。しかし青空は見える。大休止の後、雪倉の滝まで大滑降。爽とはいえないが、気分は最高。せつ訓の後、温泉に帰幕し、満点の星空の下、露天風呂に入ってほくほくと眠る。

5日 温泉から南小谷に向かって帰る。林道の上をスキーで行くが、所々雪が解けていて、スキーの着脱が面倒だ。里はもう新緑の季節で、昨日の滑降は夢のようであった。(中村記)





8707 奥秩父 笛吹川  
東沢 鶏冠谷左俣

6/28 上野 斎藤 中村

東京を深夜に斎藤氏の愛車で出発。I・Cを一つ通り過ぎ、さらに道に迷いつつも西沢溪谷に何とかたどり着いて車中仮眠。

朝食後遡行に出発。天気はあまり良くない。沢登りはやっぱりスカッと晴れてくれないと悲しいなあとか考えているうちに鶏冠沢出合いに着く。魚止め滝を越え、しばらくゴ-口状の谷を歩くが、奥飯盛沢出合付近から滝が増え、変化が出てくる。水量も多く、沢登りを久しぶりにやる自分にも技術的に困難ではない。一の沢出合いの滝は左岸から高巻く。谷は明るく開けていて、ナメ滝が連続して気分がよい。水量がほとんどなくなった辺りで、谷を離れ尾根に出た。鶏冠山を通って鶏冠沢出合いまで戻る。途中見晴らしの良いところで、沢の水で入れたコーヒーは格別であった。(中村記)

8708 西丹沢 中川 箱根屋沢

7/12 中野・山田・上野・斎藤

(天気 小雨-曇り)

前夜のうちに、入溪谷口である箱根屋橋のたもとまで入って仮眠。翌朝、今にも泣き出しそうな天気の中を出発。3段トイ状20m滝が現れ、右壁を越える。いくつかの小滝を越えて、12m滝、2段逆くの字滝とも難なくクリア。続いて現れる2段20m滝は、下部は階段状で楽であるが、上部ナメは傾斜こそ緩いが、1たん足を滑らすと下部まで落ちていきそうで緊張させられる。

一息着く暇もなくすぐに15m滝が目の前に立ちはだかる。本日のメインとも言えるところで、アブミを用いた人工で登る。右斜上するバンドを辿り、詰まったところからアブミの書け換え4~5階ほどで落ち口の草付までゆき、腕力登攀で草付へと移りホッと一息着く。アブミを持たないものがあるので、その都度落ち口からアブミ投げ降ろして登る。残置ピン、ボルトは豊富にあり、初めてのアブミ登攀は難なくこなすことができた。

緊張感もほぐれ、沢も源流の様相を呈してきたが、いささかあれ気味で倒木が多くあるきづらい。早めに左の尾根に逃げて、尾根状のかすかな踏跡を辿り、980m峰上にてランチ。天気は相変わらず曇りで今にも雨がきそうである。下山は屏風岩山、王滝峠を経て、車のあるところまで駆け下る。(上野記)

8709 北アルプス  
有峰－雲の平－新穂高温泉

8/9～12 吉田他3人

9日（雨のち曇り）有峰－太郎小屋

前日に有峰まで人っておいたので、夜行山行のような疲れはない。バス停で山田達に会うが、我々は縦走なのですぐに別れる。1ピッチ目は小雨も降っていたが、それ以後は天気も急速に回復。昼過ぎにテン場に着く。

10日（晴れ）太郎小屋－雲の平小屋

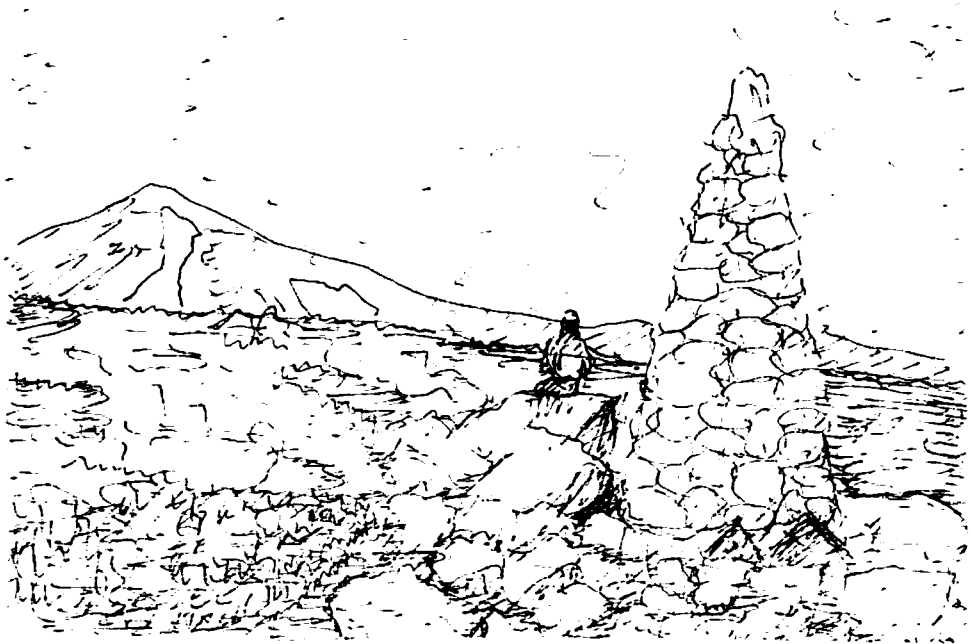
今日は黒部側を越えて、一気に雲の平に行くコースである。雲の平は一度行って見たかった所なので期待していたが、思ったほどでもなく、イメージとは違ったものであった。しかし、天気もよく、360町が見えないここはなかなか良い。

11日（晴れ）雲の平小屋－双六小屋

今日も快晴、足も軽い。三俣蓮華岳のピークで一休みして、双六岳までのんびり歩く。双六小屋で飲んだビールはうまかったのなんの。

12日（晴れ）双六小屋－新穂高温泉

天気に恵まれた山行も今日で終りである。下山するにしたがって、暑さもまし、思ったより疲れた。新穂高で風呂に入り、高山で一泊。山行の打ち上げをする。



## 8 7 1 1 奥武蔵 バラモ沢・冠岩沢

8 / 10・11 青谷他1

秘境と言われた浦山地区最奥の集落に、ツキノワの会の仲間と民家を購入したので（西朋の皆さんも使って下さい）、浦山川流域は我が庭になった。暇を見ては名も知れぬ沢をたどって縦横無尽に歩いてみようと思う。

ただこの流域も開発の波が押し寄せており、浦山ダムの建設が本格化して、下部の変容はすさまじい。大久保谷には入ることもできなくなってしまった。しかし、大持山から有馬山・大平山にかけての上流域は、サル・シカ・カモシカなどの野生動物も生息し、美しいブナ林も奥武蔵では珍しく残っている（ごく一部だが）ので、純朴な山里の人々との交流ともあいまって、心をなごませてくれるものがある。

真夏に涼を求めて沢に入ってみた。バラモ沢は、古いガイド（S43年版アルパインガイド）には、短くも滝を連ねた好ルートと紹介されている。

中学校やや上流より踏み跡を本流に下り、対岸のバラモ沢を見る。すぐF1。10メートルぐらいあり。シャワーをまともに浴びれば直登も可能か。左手のはしごより巻く。いくつかの大滝を越えると、ナメ気味の連瀑。ザイルを出して右壁を快適に上る。ここより我然鉄はしごが目立ち始める。そして何と社があり20メートルの直瀑に行き当たる。直登不能。ここで打ち止めとする。下降ははしごの残骸をおそるおそる下る。

村の人に聞くと、かつてどこかの信仰団体が、滝参りの施設を作ったのだとか。放置された残骸を撤去しないかぎり、バラモ沢の沢の登りの楽しみは戻ってきそうにない。

さすがに真夏の奥武蔵。冠岩沢は下部にボサもあって、チョイト快適とは言いがたい。それでも中間の15メートル滝周辺はすっきりしており、そこでザイルで遊んで引き返した。（青谷記）

## 8712 南アルプス 明神谷

8/13~15 青谷 中村 中野

8/13・14

南アルプス南部は、何度来ても魅力は尽きないが、アプローチの長さだけには参ってしまう。大井川鉄道でコトコト、大鉄バスでガタガタと乗り継いでやっと明神谷に到着。

しばらく林道を歩くと谷へ出る。谷は開けていて水量も多い。大きな滝こそ少ないが、行程も長く人もあまりいないのがよい。しかし途中で弁当の食べ残しがプラスチックパックごと捨てられているのを見て悲しい気持ちになる。なぜこんな場所にゴミを捨てるのだろうか。

泳ぎやへつりも少々あるが、谷の中を普通に歩いても遡行できるところが大部分なので、早いペースで進む。谷が二俣に分れている広い河原で幕営。釣りの仕掛けを持ってきていたので、木の枝を竿にして、川虫を餌に淵を流してみると、アマゴが釣れた。焚火で塩焼にして夕食のおかずになった。うまかった。そうとしか言いようがないほど本当においしかった。

8/15

幕営地から尾根までの谷は源頭の様相であり、広い河原を歩いて登りつめる。途中で鹿の親子に出会う。写真を撮ろうとして近づいたが、逃げられてしまった。少々藪をこくと稜線に出る。

稜線といっても樹林の中。景色はよくない。大無間山へは割としっかりした踏み跡がある。一度登ってみたいと高校の時思っていたので、大いに期待していたが、その山頂へはあっけなく着いた。確かに山奥だなという感覚があるが、これといって特長もない山であり、少々期待はずれ。しかし山頂の展望はよく開け明るいので気分はよい。櫓があったので登ると、南アルプスの主脈が一望できた。

少し道を戻って、寸又林道へ降りる。道は荒れ気味で歩きにくい。林道に出るとホッと一息。だがこの油断がいけなかった。プラブラと歩いていたら夜になっても寸又峽には着かなかった。林道による山の崩壊を嘆きつつも、すいたおなかを抱え、ひたすら寸又峽温泉へ。「おんせん、おんせん、ごはんも食べたい」とつぶやきながら歩き続けた。(中村記)

# 8715 丹沢 玄倉川小川谷廊下

9/13 河合・荻田・浜田・山田・吉田・鈴木

(曇り)

西高9月山行の同行ということもあり、数名は前日から一泊している。後発組は川合氏の車で朝出発、小川谷出合で合流する。コースガイドを読むと初心者の高校生を連れていくことに不安を感じるが、一か所4メートルのチョックストーンが苦勞しただけで、後は難なく進むことができ、東沢を合わせるゴーロに出る。下りは中の沢経路を使い下山。(吉田記)



## 8721 皇海山 小田倉沢

9/10~11 上野・斎藤

10日(晴れ)

沼田駅の待合室での仮眠の後、尾瀬へ向かう満員バスを尻目にガラガラの路線バスに乗車。ふとした手違いで本来降りるべき停留所を通り越して終点の鎌田というところまで行ってしまふ。仕方なくバス停の売店で行動食にと林檎二個を買って折り返しのバスに乗る。(ここで何の気なしに買った林檎がその後とても有難いものになるのである。)

「切り通し」というバス停で下車、農道を奈良集落まで歩く。集落の畑が現れたところに右の雑木林に入って平川本流に降りる。少し上流をたどると右から入って来るのが小田倉沢である。出合いは伏流となっている。滝らしい滝もなく、平凡な流れを辿ると、突然20m滝が現れる。この沢唯一の滝らしい滝である。しかし、右から簡単に越えられる。このあたりから、沢床の際に、石積の堰らしき物が幾つか見られ、昔この周りに集落があったことがうなづける。左岸台地上の所には酒ビンやら錆びたドラム缶、ワイヤーなどが散乱しており、何か不気味な感じさえする。しばらく行った二俣のところで幕営。ここで一つ目の林檎を消費する。

11日(晴れ)

翌朝、左俣に入る。水流はすぐなくなるが、また水流が現れるだろうとタカをくくって水の補給のないまま進む。ふと目の前の黒いものが動いたかと思うと、ものすごい勢いで走り去っていった。鹿じゃない、確かに「熊だ」と思った。こんな所に？と思いつつも、この先、半信半疑の斎藤に呼び子を吹きながら行ってもらう。こんなこともあってか、喉の乾きが気になってくるが水がない。稜線上に出ると所々に赤布があるが、読図をしないと先に進めないような地形である。鹿のヌタ場と思われるものも数多く見られ、野生味溢れるところである。

皇海山に着いたところには喉カラカラで、唯一の水気のものである、一個の林檎を二人で分ける。当然この程度では喉の乾きをいやせるはずがなく、水を求めて庚申山荘めがけて駆け下る。下山は通りすがりの車の誘いも丁重にお断りして、変な意地を張って足尾線原向駅まで夜の林道を歩き通したのでした。

小田倉沢は、沢登りを主眼に置くと、大きな期待はずれを食らうであろう。皇海山へのアプローチとして考えれば面白いかもしれない。(上野記)

## 8725 南アルプス 赤石岳－聖岳－上河内岳

12/28～1/4 山田・三宅・上野

28日（晴れ）

前夜のうちに、金谷駅に入り仮眠の後、朝一番の大井川鉄道で、井川へ向かう。井川でバスに乗り換え畑薙ダムへ。天気は上々、重たい荷物を背負い、林道をひたすら歩いて、今夜は樺島泊まりとする。

29日（晴れ）

さあ今日からいよいよ縦走の始まりだ。ザックの重荷と長い前途を思うと、果たして無事に最後までついて行けるかどうか不安になるが、私にとっての登山での最大の至福である、山頂での一服を夢見つつ黙々と歩く。さすがにバテ気味となり、レスト中に寝てしまう始末。やむなく今日は無理をせず赤石小屋泊まりとする。天気は下り坂の様子で、明日の行程を案じつつ眠りにつく。

30日（ガス強風）

外はガス。辛い風が弱いので、出発する用意をして、外の様子をうかがうが、次第に風が強くなってくる。9時頃、停滞と決断する。昨夜同じ小屋に泊まっていた5～6人のパーティーはすでに出発しており、この天気で大丈夫なのかなと思う。

31日（快晴）

今日は赤石に向かう日。気合いを入れて出発。夏道だと、小赤石岳をトラバース気味に赤石本峰へと向かうが、冬期は忠実にラクダの背をたどる。天気は良いが風は強い。三宅が目出帽を谷底へ飛ばされる。尾根がリッジ状となったところで、山田をトップにザイルをのぼす。後二人はブルージックで登って行く。極度に緊張するところもなく、無事に小赤石に到着。そこからほんの一投足で赤石岳。稜線上から頂上にかけては、風のためか雪はほとんどついておらず、寒さだけが冬山という感じである。

記念撮影の後、肩の避難小屋に下り、ランチをとる。相変わらず晴天であるが、風が強く冷たい。暖かいミルクティーが体にしみわたる。稜線上の一面の雪原を百間洞へと向かう。ガスがかかるとルートファインディングに気を使うところだが、幸運にも晴天。雪焼けが気になる程である。低いブッシュの間のラッセルに手間取った後、百間洞とおぼしき所に到着。ドアのない、雪に埋まりかけのトイレがある。今日はここで天幕泊まりとする。時は大晦日、夕食は年越しそば、シュラフにもぐり、三宅氏持参のウイスキーをやりながら、ラジオの紅白歌合戦と共に1987年最後の夜は更けて行くのであった。

1月1日（快晴）

日の出前、暗やみの中を出発。大沢岳へ向けて、ハイマツ帯の雪斜面を登る。中盛丸山山頂で日の出を迎える。東方に鎮座する策ケ岳・布引山から溢れる朝日を仰ぎつつソロ写真大会と相成る。兎岳避難小屋でランチの後、右下の大崩壊地を気にしながら

ら聖岳へ。所々、北東斜面の雪面を巻気味のトラバスにより通過。ようやく前聖に到着。皆で握手の後、360度遮るものない展望にただ感激。早速一服、風は強いが、この至福のひとつときは何ものにもかえがたい。

聖からは、雪のない急なザレをくだる。足がガクガクになった頃、雪が見え始め、そこからは足を投げ出すようにして下る。今日は聖平泊まり。早く着いてシュラフでも干そうかなと考え、猛スピードで下るが、着いたころには日が陰り始め肌寒くなっていた。小屋の二階にテントを張る。

#### 2日(曇り)

メインイベントである昨日の聖が快晴の中であったので、今日の悪天候を予想させるガス曇りもさほど気にならない。上河内への稜線に出ると風も出始める。三宅氏が上河内を往復する。お花畑とおぼしきあたりから日が射し始め、ルンルン気分で茶臼小屋に下る。その日のうちに茶臼岳を往復する。

#### 3日(曇り)

小屋内に荷物をまとめて仁田岳アタック。さすがにこの辺りまで来ると人も少なくなる。ウソッコ小屋はきれいな小屋で、先人の残っていた食料が小屋のすみに山積みされている。明日の下山に備えて、過剰気味の飲料・食料を消費しまくる。

#### 4日(曇り)

今日は下山、入山日あれほど重たかったザックも今では気にならない程度になっている。三宅氏がバスの予約のために先に下る。大吊り橋を渡り、畑薙湖を右に見ながら、今までの行程のことを思い浮かべる。一週間にわたる山行も本日で終了、静岡のトンカツ屋で乾杯。

今回は積雪量が少なかったのか、50cm程であり、厳冬期の山行という感じはせず、技術的にも困難はなかったが、一通り縦走を終えたことで充実した山行であった。

(上野記)



## 8726 八ヶ岳 ジョウゴ沢 峰ノ松目沢

1/5・6 青谷・斎藤

5日 合宿不参加組で、恒例の氷登りに出かけた。夜行で新宿をたち、午前中に鉱泉に入る。足慣しにジョウゴ沢に入る。F1・F2は凍結状態もまあまあで、ザイルを出して越える。しばらく開けた河原を行くと、ゴルジュ状の細い氷床となり、氷も固く、小滝が連なって面白い。まもなく左岸より右ルンゼがナメで入り、氷柱が垂れ下がっている。これを見送り、しばらくラッセルを続けるとどん詰まりで大滝となる。氷の発達が悪くオーバーハングとなっているため、写真だけ取って引き返す。半日の足慣しにしてはまずまずであった。

6日 な、なんとバイルがない！信じがたいことに、不審な足跡と共に、テントの4点に立てておいたカジタのチューブが盗まれた。山男のモラルもここまで落ちたか・・・ガックリして鉱泉にいつてぶつぶつ言っていると、ガイドの宮崎学氏もアイゼンがないという。あわれんでくれて、特製バイルを貸してくれることになった。さっそく気を取り直して峰ノ松目沢に向かう。しばらく美濃戸に向かって下っていくと、右手に氷柱が散見される、峰ノ松目沢が見えてくる。

しばらくして沢筋が狭まってくると、氷瀑が出てくる。南東面ながら、氷結もよく、快晴で底抜けに明るい。次から次へと表われる氷瀑も快適。垂直気味の氷にも宮崎特製バイルは威力を発揮し、道具の良さに感心する。フィナーレは氷柱が三本続き、一段目は何とかクリヤーしたが、上2段は垂直のツララ状で断念。左手の草付から大きく巻く。源頭を左にまわりこんでいくと、あっけなく峰ノ松目直下の稜線に出る。稜線は踏み跡もなく静かそのもの。ラッセルは辛い、新鮮な構図の景色を楽しみつつ、硫黄をまわって鉱泉に下る。(青谷記)

# 1988年度山行記録

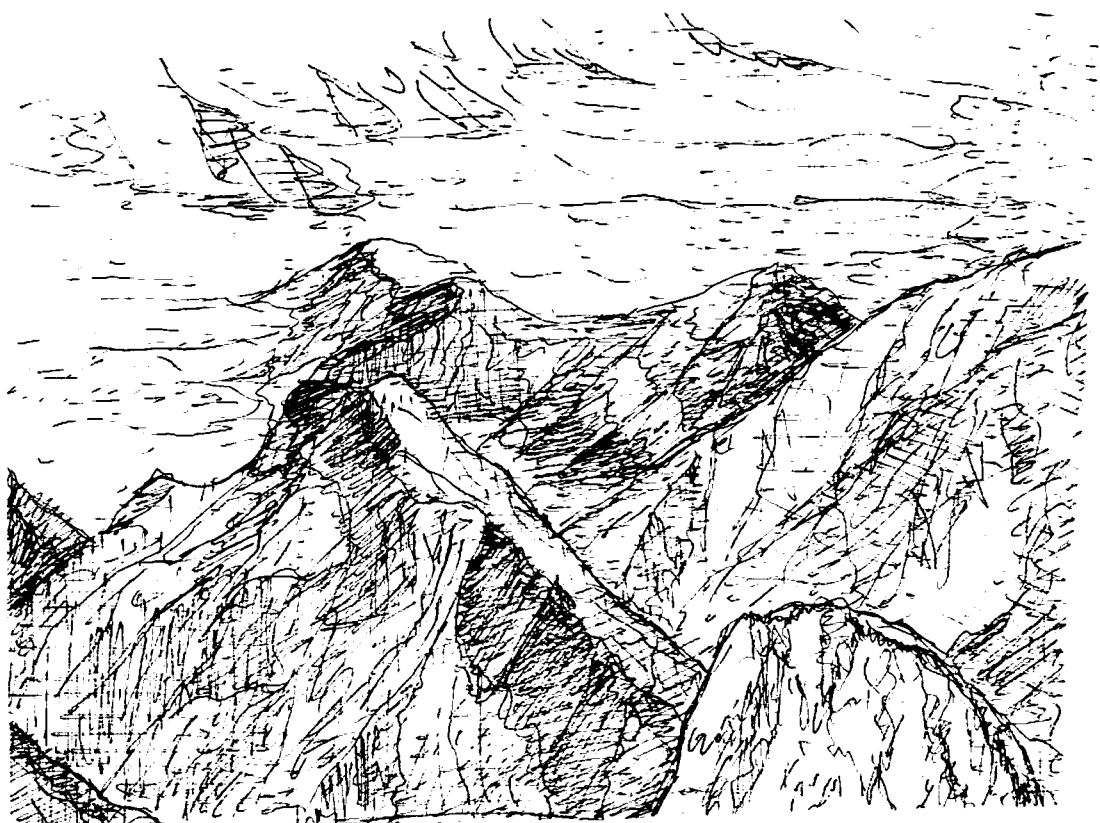
## 1988年度役員

会長	渡辺喜仁
チーフ・リーダー	青谷知己
学生リーダー	山田裕久
西高係	上野午良
	額賀淑郎
会計	中野敏彦
例会	新倉秀也
記録・会報	鈴木学
	三宅克生
装備	山田裕久
保険	荻田哲也
都岳連	青谷知己

## 8806 細久保沢 左俣

88年8月4日 (青谷)

浦山の沢巡りの第三弾。ツキノワ荘より、バイクに便乗して出会いに行く。すぐ2段の滝だが、右手の山道より巻く。豊かな流れ、時折走る魚影、青い苔。大きな滝こそないが、時々、はっとするような美しさがある。山道が横切る前後に滝らしい滝を散見して、まもなくグミの滝となる。美瀑、巻き道はずっと手前があるが、無理して右壁の弱点を越えてしまった。ここより山道をたどり、消毒している最中のわさび田を見送り、長沢背稜にあがる。仙六峠より川俣までのんびり尾根を下った。



## 8807 夏合宿 双六岳～黒部源流 ～東沢下降

1988年8月9～17日 (山田 額賀)

初の夏合宿山行、しかも山田氏と二人だけということはどうなるかと思っていたら、西朋では珍しくのびのびした長期沢登り&縦走山行となり、沢登りの魅力にとりつかれる結果となった。

初日は飛騨温泉口から予約しておいたタクシーに乗り込むと、30分程で車止め地点に着く。そこで身支度をしていると、工事用のトラックがあらわれ、運よく分岐まで乗せてもらう。そこから、林道を一時間程歩き、広河原に着。入渓するが、巻き道まで登り返し、打込み谷出合い前まで進む。歩(時間4h30m)。2日目は、大屈曲をこえ、3P程で、下抜戸の広河原につく。転び、顔を濡らしつつ、昼過ぎに蓮華に出合いで帰幕。水量は豊かで余り変化はないが、河原歩きがしやすくなったようだ。

(歩行時間 6h30m)

3日目は、九郎衛門沢出合いをみぎから大きく高巻き、右岸に渡り、九郎衛門沢上流の小沢から取り付く。最初で最後のザイル1Pを出して大滝上まで高巻く。後は小滝の連続を気持ちよく乗り越え、黒部乗越に至る。谷から広々とした稜線に出ると解放感がある。また、眩しい陽射しの中、青空と緑草と赤い黒部小屋とが絵のように似合う。五郎沢を駆け下ると祖父平付近くで帰幕。(歩行時間 6h)

4日目は、馬木沢から黒部五郎岳へのアタック。釣りをしながら、(結局つれなかったが)赤木沢出合いまで下る。途中、鹿と釣人に合う。出会いはプールのようにコバルトブルー。しかし、馬木沢はあっけなく終わり、五郎岳頂上に立つ。五郎岳は、岩と雪渓とはい松が見事に調和して強烈な印象を与えている。(歩行時間7h30m)

5日目は、黒部源流を廻り、鷲羽岳アタック、水晶岳まで縦走し、東沢乗越下で帰幕。今日は縦走日和だが、暑い日照りの中、疲れが出てきたようだ。(歩行時間9h30m)

6日目は、単調かつ一直線の東沢を下る。西朋の記録によると、かつて、枝沢の鉄砲水によりなくなった方がいるらしいが、そんな気配も薄く、ひたすら下る。

(歩行時間 6h30)

最終日は、平の渡しの時間にまに合うように、暗い中早めに東沢ヒュッテを発。後は、黒部湖半周を黙々と歩き続ける。最後は、観光客で賑わう黒部ダムで終了。

## 8810 北ア 北鎌尾根

1988年9月23～25日 (吉田 山田 三宅)

1日目、高校時代、憧れの山の一つに槍ヶ岳がある。そのコースの中でも、特に深い思いを寄せるのが北鎌尾根である。初秋の清々しい岩稜登りとそこからの景色を想像すると自然と心も踊ってしまう。

葛温泉迄タクシーで行く、高瀬ダムのところまではいってくれないかと期待するが、やはり駄目だった。3Pの林道歩きを終えて、やっと登山道に入る。湯俣温泉迄は平坦な道である。水俣川に入り、千天出合いあたりで、テントを張る。

2日目、前日の天気とは打って変わって、朝からの雨である。暫く、天を眺めて、前に進むか、戻るか考えてみたが、1日目のコースの長さにめげて、前に進むことにする。雨が小降りになったときを見計らって、テントをたたみ出発する。北鎌沢は、雨で水が流れており、もはや沢登の感覚である。コルについた辺りで雨はいっそうひどくなるばかりである。覚悟を決めて前に進んだものの、雨と寒さで休む気にもならない。おまけに、楽しみにしていた眺望もゼロであり、気は滅入るばかりである。独標もはっきり分からぬまま通過し、北鎌平につく。本来は、ここからは槍の頂上は直ぐ近くに見えるはずだが、それもなく、ただひたすら最後の登りにとりかかる。頂上直下で、山田がスリップし2-3m落ちるアクシデントもあったが、無事槍に到着、しかし、ずぶ濡れ。一目散に下り、殺生でテントを張る。

3日目、結局、憧れの北鎌は一度も微笑んではくれなかった。雨の降る中の下りは、もう何も考えることはない。横尾あたりでやっと雨は上がったが、下はべちょべちょ、次にくるときは天気になってくれよ。

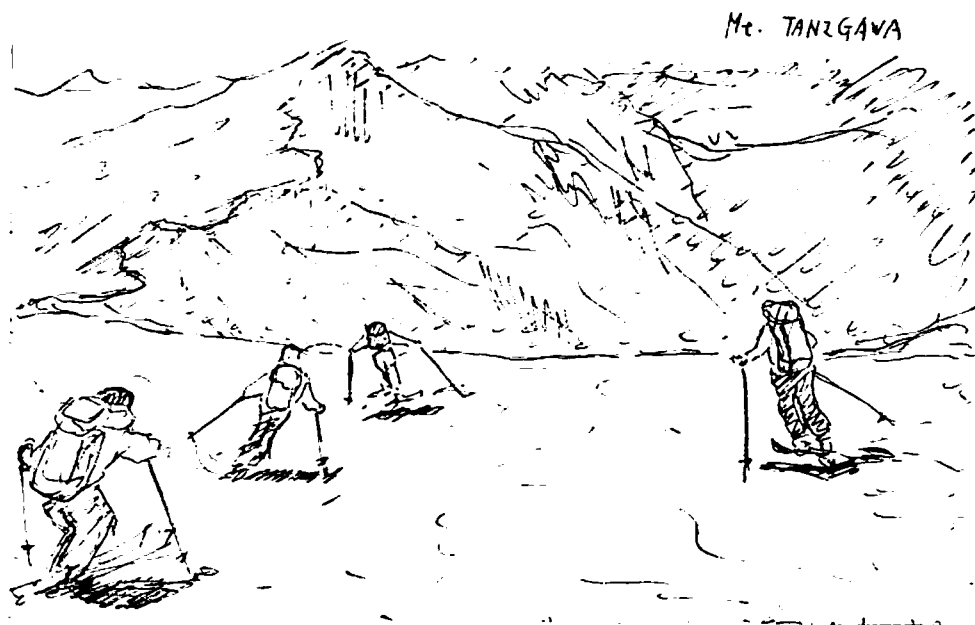


## 8811 栗駒山 産女川

88年10月1～3日 (青谷他1)

都民の日を利用して、同僚の中野氏との初沢登りである。夜行で一ノ関まで入りタクシーを拾う、途中、厳美溪に寄ったりして迷った末、林道に入る。入口は通行止であったが、ロープは止めてあるだけでOK。産女橋までは入ることができた。橋付近はゴルジュである。すぐ上より入溪。まもなく、沢幅一杯の滝。左壁の細かいホールドを拾って登る。擬灰石質の滑滝が次々に現れて楽しい。3m程の滝が連続する連瀑帯を抜けると前方に大きな滝が見えてくる。下段8mは右壁、上段20mは右壁の残置ピンを利用してザイルを出して越える。ここより河床は礫岩質や溶岩があらわれ、一時散漫になる。どんずまりにかかるゴルジュ10m滝は右壁から巻く。しばらくで、大きな釜を前に、ナメ滝帯が始まる。稜線も近ずき、安山岩質のナメは快適の一言。草紅葉も見え始め、草原帯のおだやかな流れに変わっていく。ハッとする紅葉を振り返りつつ、流れの脇に立つ 森避難小屋に感激の到着をする。産女川は火山の基盤層から上部まで掘り込んだ沢であり、時々表情の変化を確認していくことは火山の生い立ちが解るようで面白い。

翌日、ガスの栗駒山山頂に向かう。しばらくで、ガスもとれ真っ青な空がのぞく。稜線は一面の楓の錦繡。とにかく凄いの一言。いまだかつてこんな美しい紅葉は見たことがない、絶対のおすすめ。下山は御室、お花畑の草原を経て、花山コースを温湯に下る。下部のブナ林帯も美しい。ただ湯ノ倉温泉付近の林道、沢筋は大荒れであった。

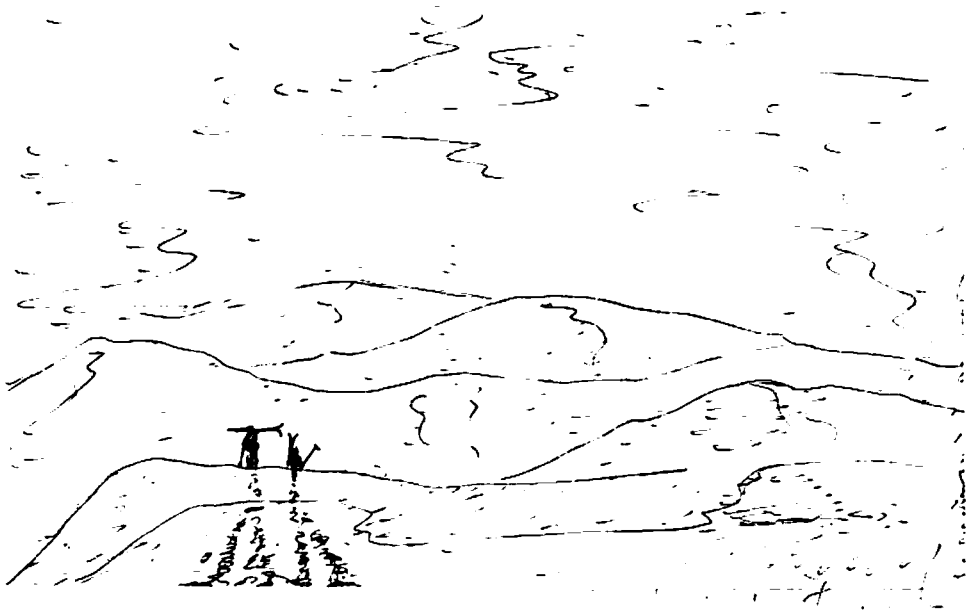


## 8815 雪訓 木曾御岳山

11/26・27 山田・額賀・内倉

26日 寒い夜行を乗り継ぎ、木曾福島へ着くころはもう既に通勤・通学時間であった。タクシーに乗り御岳スキー場へ。さっそく人がまばらなゲレンデのど真ん中をワカンで登り始める。山田氏はシール歩行で、額賀氏と二人だけのラッセルは1Pで充分すぎるほどきつかった。3P程でスキー場を抜け、一層深い新雪帯に突入。三笠山を越えた辺りで幕営にするが、新雪はいくら踏んでも固まらない。

27日 翌日、頂上ピストンへ出発。スタート時から登山道でも膝まで雪がある。夏はここまで車が入ると思うと腹が立つ。七号目あたりから風が激しくなり、思うように進めないが、雪は吹き飛ばされている。九号目を過ぎた付近で時間切れ、無念の撤退をした。帰路のスキー場では銀マットで滑りながらの下山。結局、ラッセル以外雪訓らしいものは行わなかったが、それだけに登頂断念が悔やまれた。新人の私が遅れ気味であったことと、アプローチの長さ（帰路は普通列車）が問題点であろう。（内倉記）



1988年12月29日～1989年1月1日 (青谷 三宅 上野 額賀)

今回の冬合宿は、天候、避難小屋にも恵まれ、氷瀑と雪稜歩きをミックスした楽しい合宿となった。

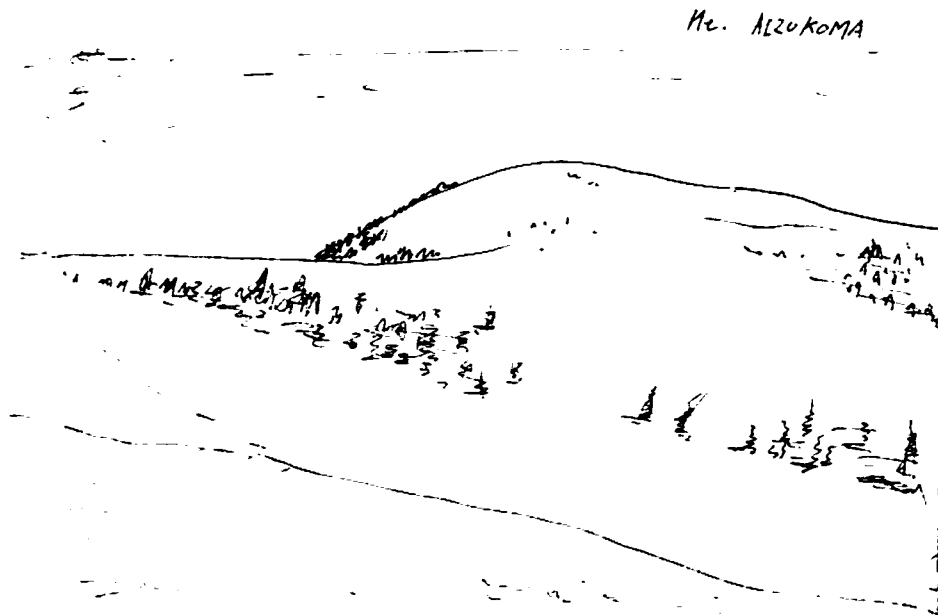
初日はタクシーで、木曾駒高原スキー場に行き膝下ラッセルを交えながら遡行をはじめ。比較的なだらかな斜面を重荷を背負いながらF1、F2を越え、二俣につく。40mは比較的雪が多くて、完全に凍結していなかったが、入門者には手ごろなアイスクライミングができた。直登後、沢ぞいにテントを張る。

2日目、トラバース道に気が付かず直登し、途中から尾根に出て、麦草岳頂上につく。青谷氏もかつて麦草岳への思いを断念したことが果たされたせいか、笑顔で写真にポーズを取っていた。快晴の中、木曾駒はどっしりと見え、圧倒された。木曾駒は、のっぺりとした印象を持つが、ここから見ると二等辺三角形で見栄えが宜しい。七合目避難小屋に戻り、快適な山小屋生活を味わう。

4日目、麦草岳から前岳を経て木曾駒へアタック。雪稜歩きで、ザイルを一か所残置する。頂上までアップダウンがはずく木曾駒は大晦日のせいか風が強く早めに引き返す。

三宅氏がばて気味で、少し遅れて帰る。予備の食料をすべてだして腹一杯の大晦日を味わう。

最終日は、雪がふる中、福島Bコースを一気に下る。





## 8818 西上州 入山川谷急裏谷IC

1989年1月6日(上野 額賀)

充実度満点のアイスクライミングを目指して、並木沢を取り止め、裏妙義の入山川裏谷急谷入溪した。

しかし、氷はほとんど発達しておらず、落ち葉を掻き分けるハイキング登山となった。F6-20mに多少の氷があるのみで、溪の面白みはうすかった。白純の다가頂上から見た初冬の妙義山、浅間山が目眩しかった。

帰りは、妙義らしく、地図に乗らないアップダウンが激しく、横川駅に着いた頃は暗くなってしまった。



額賀川の急谷

## 8 8 2 1 芦別岳

1989年3月14～17日 (吉田 山田)

14日、学生時代の最後の山行になるであろう今山行では、今までまったく行ったことのないところへしようということで、夕張山地の中の雄峰芦別岳二行くことにした。なにせ、北海道の雪山は初めてなので、吉田が一足先に富良野に入り、下調べをする。富良野のスキー場から富良野西岳、布部岳、お茶茶岳をへて、芦別岳にむかう、を採ることにする。14日の午後、山田と合流し、直ぐに行動を開始する。今は、北の峰と西富良野岳戸のコルにテントを張ることにする。

15日、一日中の吹雪きで視界がゼロ、停電になる。

16日、一応雪は止んだが、雲は垂れ込んでおり、富良野西岳すらみえない。低気圧も近付いているようだし、どうするか迷うところである。7時迄待ってみて、天気は回復し始めたので出発する。天気は日が射したかと思うとまた直ぐに雲が垂れ込めるといった不安定なもの。富良野西岳も見え隠れしている。1時間ほど歩いて富良野西岳の基部に着いたところで引き返すことにしてもとの道を帰る。富良野スキー場で少し遊んだ後、富良野駅に行き、そこでタクシーをひろい冬尾根の取り付けまでいってもらう。

縦走を諦めたので芦別岳直接登るコースに変更。ここなら1日で頂上に立てるので、天気を見ながら行動できる。タクシーを降りて2時間ほど歩いたところでテントを張る。

17日、芦別岳への冬の一般的なルートとしては、新道の尾根か或いは冬尾根があり、どちらも7～8時間のコースである。

スキーの滑降は、冬尾根が優るようなので、このコースを選ぶ。雪がしんしんと降っているが、とにかく行けるところまで行ってみる。パウダースノーなので、スキーの威力を存分に使える。3P程歩いて半面山の手前辺りから風も強くなり、目の開けていられなくなる。半面山から先は視界もまったくなく、ここで引き返すことにする。下りの滑りは膝まで潜るほどの新雪のためスキーのコントロールが殆どできず、快適とは程遠いものとなってしまった。雪だるまになった頃、ようやくテントに戻ることができ、テントを回収した後、直ぐに山部の駅に向かってスキーを滑らせた。

## 8822 道東 知床海別岳 知床峠越え

1988年3月28～30日 (青谷)

北海道の3月。オホーツク沿岸には、まだ流氷があるはずだった。流氷が見たい、そしてついでに、北海道の山スキー！と考えて、単独、知床を目指すことにした。

海別岳は知床半島の付根。斜里町から見上げると、鋭角の斜里岳とは対称的なおだやかな山容を目にすることができる。本多勝一がその「北海道探検記」で絶賛している。流氷は影も形もなかったが、全く静かな、そして雄大な知床の雪山を満喫することができた。

3/28 (晴) 休養村7:20～林道8:50～760m 地点10:50-11:20 ～肩13:37 ～海別岳14:07-20～森林限界15:30-42～休養村17:20

ウナベツ自然休養村管理センターが海別岳の格好のベースになる。宿の前よりシールをつけて、ゲレンデを斜登高。途中の切開きより海別岳を目指す。樹林帯を抜けると一面雪原となった牧草地になる。これを横切り、低木の密生する樹林の切開きに入る。一步一步踏み抜く感じの雪に相当消耗する。やっと海別岳の斜面に登り着くと、しばらくで森林限界になる。やや白っぽい空と真っ白で広大な斜面。背後にオホーツクの海岸線が緩く弧を描いている。頂上左から派生する緩い尾根にとり着く。

茫漠たる雪の斜面は果てしなく、ただ黙々とスキーを前に出す。やっとの思いで稜線に飛び出す、さすがに疲れて震えがきた。ここよりアイゼンにはきかえ、やせた稜線を登り詰めると、1つのピークの先に頂上が見える。ゴツゴツした斜里岳、重畳とした遠音別岳への連なり、誰もいない、一人だけの絶頂。宿を出て7時間近い登高であった。

写真もそこそこにデポ地まで戻り、スキーをつける。疲れてスキー操作は心許無いものがあるが、大きなパラレルターンを描いていく。森林限界まであっけなくすべり込む。思わず、やったね！と笑みがこぼれる。迷路のようだった樹林のスキー跡をたどり、牧場へ。直滑降が何とも快適。いつしか太陽が西に傾き、オホーツク海がオレンジ色に輝いて、フィナーレを飾ってくれる。

3/29 (雪)

朝より、ウトロに移る。知床自然センターを尋ね、解説員と一緒に山スキーで付近を散歩。民宿「酋長の家」に入る。折よく、この宿はクロカンツアーをやっており、翌日は知床峠までツアーすると言う。同行することで話がまとまった。

3/30 (快晴)

このたびの後半で釧路湿原などをまわってみたいと考えていたので、カメラ器材など一式で25kgのザックをしょって知床峠をこえることにする。夏は混雑すると言う知床有料道路もすっかり雪に埋もれ、スノーモービルの跡がその道のありかを教えている。クロカンを楽しむ6人と一緒にセンター前をスタート。軽装の連中とは対称的に大汗。おまけに靴擦れ気味になって、かなりバテル。途中、無名ピークへ行く4人

組と分かれ、3人で知床峠に向かう。忠実に道路をたどっていくと、次第に羅臼岳も眼前に聳えてくる。苦しむこと5Pで知床峠。ラウス側はるか見下す先に、国後島が見え、峠越えを実感する。ここより、皆の激励を受け、1人ラウス側に踏み込む。急斜面につけられた道はすっかり埋もれ、僅かにミラーその道の存在を示す。広大な知床の山中を一人占め。時にはショートカットするものの、ほぼ忠実に道らしき所をたどっていく。ヘアピンカーブ部分は吹き溜まりで、さんざんハデに転倒する。それでも後半ではスキーも滑り出し、雪の橋を渡ったりで恐ろしい面もあったが快適に飛ばす。峠より約3h ラウスは熊ノ湯の脇まででフィナーレとなる。1番近い知床湿原ホテルに辿り着いたときは、さすがにヨレヨレの状態であった。スキーによる峠越えはあまりされていない様子、時折スノーモービルが走っているようであった。好天の1日、軽装で知床半島縦断。おすすめのツアーである。



# 1989年度山行記録

## 1989年度役員

会長	遠藤彰信
チーフ・リーダー	青谷知己
学生リーダー	額賀淑郎
西高係	内倉昌治
	新倉秀也
会計	高橋寛和
都岳連	青谷知己
記録・会報	等原紀子
	岩広哲典
装備	額賀淑郎

5/3～5 上野 額賀 高橋

5/3 浅草7:20 — 10:40会津高原11:30 — 12:40檜枝岐13:15 — 16:30(幕)

彼らの世界へ足を踏み入れようと思ったのは何時の頃だったか、今はもう思い出すことさえも煩わしい。毎年彼らの世界はかならずやって来る。そして我々がやって来るのを手ぐすね引いて待っているのだ。そうとも知らず、また今年何人の亡霊たちが寒空の街をさまよい歩くことになるのだろう。禁じられたゲームのルーレットは、もうすでに回り始めていることに誰も気付く事なく、時は何事もなかったかのように刻まれて行く。長い時間の中では人なんてゴミにも満たない存在なのだろうか。

行きかう人もまばらな6:00の浅草に集合なのだが、我々の出発を心良く思っていない者がいるかのように、いきなりハプニングが起こる。行けない者1名、時間通り来ない者1名。無表情な他人を抱え込むホームで電車を1本遅らせて待つが来る気配がないので、しかたなく重い足取りで2人だけで出発。空も祝福の様相を見せないつものようだ。会津高原駅に着き、次の電車で遅れた者が来るのを待つ。ほどなく次の電車がやって来た。疲れきった死人を押し出すダムのように電車が人々を吐き捨てる中、遅れた某氏はやって来て、ようやく3人そろった。バスは他人事のように行ってしまった後だったが、運良く血のようにどす黒いワゴンタクシーをつかまえ、相乗りで檜枝岐まで入る。相乗りしたパーティーはさらに先まで乗っていった。去り行く車は曇天の下、霊柩車のようにも見えた。行き着く先は尾瀬か、または地獄の底なのだろうか。彼らに幸あらん事を祈りつつ、湿気立ちこめる檜枝岐に降り立つ。我々もまた同じ穴のムジナである事も忘れて。

朝よりぐずつきし空も何時しか泣き始め、雨の中を登るはめになる。スキーと雨とを背負いこんだ重いザックと足を引きずりつつ、林道、木の階段を越えて尾根へと取り付く。時折すれちがう人々は、スキーとディバックという軽いいでたちで下りてくる。下にとめてあった車連中だろうか。「明日は晴れそうですね。」「がんばってください。」去る者は、いいように言葉を恵む。我々には返す気力さえも残されていない。下りて来る者はたくさんいたが、登って行く者は我々3名のみのようなのだ。虚無へでも続いているかのごとく延びる路をただひたすら歩くと、雪が出てきた。やっと春山らしくなったかのように思える。雨は何時しか雪に変わり、風と共に我々の体をもて遊ぶ。日が落ちかけて迫る夕闇は、我々の心さえも蝕む。額賀氏は1人先に進み、今夜の宿を張っている。すでにバテ気味の私達は後から追いかける。上野氏は靴が合わなく、苦しそうだ。目の前が霞んできてもうだめかと思う頃、ようやく宿に転がり込む。胸につかえる飯を水で押し込んで、泥のように眠り込んだ。明日の天気は、知るよしもない。

5/4 起床3:00 — 出発5:10 — 7:30肩の小屋7:40 — 8:00会津駒ヶ岳8:20

— 8:40月の小屋8:45 — 14:20電発避難小屋14:35 — 16:15 (幕)

翌朝目覚めてみると、胸焼けがするほどたくさんの星が空を埋めつくしていた。どうやら今日は晴れそうだという甘い期待で自分をだましつつ、喉を通らぬ飯を押し込んだ。外へ出ると不吉なほど奇麗な朝焼けが、我々の出発を拒んでいるかのごとく、朱々と映し出されていた。なれぬ山スキーは私に使われるのを疎ましく思っているようで、なかなか思い通りに動いてはくれない。使いこんだ革靴とビンディングの相性も最悪の様相で、すぐに別れたがる。それでも森林限界を越えると、死人の白さよりなお白く、そして賽の河原よりなお荒涼とした雪原が広がる。凍て付く心をだき抱えて肩の小屋にたどり着く。背後霊のようにまとわり付く煩わしい荷物を小屋に起き去り、会津駒ヶ岳頂上を目指す。透き通るほど蒼い空の下、白装束をまとい死化粧をした人々が輪になって「かごめかごめ」を踊っているかのような山々が、頂上にいる我々を取り囲み、向こうの世界へといざなっていた。縫、至仏、奥白根、彼らの世界は我々の世界とまるで違う。人が生きてはいけない世界なのではないだろうか。

頂上から小屋までは最初の滑走である。雪の白さは我々をもて遊び、その懐へ情け容赦なくゴミのようにひざまずかせる。我々に残された道は、額を地面にこすりつけたただ黙って耐えることしかなかった。小屋でランチを押し込み、いよいよ縦走を開始する。さらなる妨害が待っていることはわかっていたが、もう後戻りは出来なかった。最初の、我々を切り開こうとしている出刃包丁のようなやせ尾根は、スキーをはずして下る。その後は、さしたる妨害もなく不気味なほど静まりかえった尾根を快調にシール登高する。途中で何度かスキーをはずさなくてはならない所もあったが、そのほとんどをスキーで行ける。晴れ渡った空の陽射は、容赦なくこの身を焦がす。顔が刺すように熱い。焼いた針で刺されているようだ。思ったより大杉岳が遠く、着きそうもなかった。夕焼けは無表情に我々を焦らせる。しかたなしに大杉岳手前の樹林に今夜の宿を張る。さらに深まった夕焼けは、我々をあざ笑うかのごとく闇へと吸い込まれていった。明日のことは今はわからない。日々を生きるのに、精一杯なのだから。

5 / 5 起床3:00 — 出発5:10 — 5:40大杉岳5:45 — 7:50御池8:15

— 11:35縫ヶ岳12:35 — 14:30御池 (解散)

白んだ空は今日も晴れだと告げてくれる。このあどけない表情さえも、我々を陥れる材料に過ぎないのだろうか。朝の刺すような冷気に脅かされたのか、思ったより早く大杉岳に着く。ここから御池までは、地獄まで続く回廊のように果てしなく深く続く。スキーに嫌われているこの身は、彼らにとっては最高の獲物となってしまふ。ずがるように足にまとわりつく白装束の腕は、私を引きずり込もうと必死になっていた。なんとか逃れて林道に下り立ったのも束の間、今度は尾根1本外して別の所へ下りてしまふ。彼らにしてやられた。林道の木々は我々を嘲笑するかのように風に揺れていた。御池に戻るべくしばらく林道を進むが、どうやら方向を逆にとってしまったようだ。今来た道を再び戻り意識のとぎれる寸前、ようやく御池にたどり着く。

荷物を打ち捨て、縫ヶ岳をアタックする。しかし彼らの攻撃は容赦ない。我々はそ

れがまるで人を寄せ付けない邪教の壁であるかのような急な斜面を、這いずり回らなくてはならなかった。相変わらず強い陽射は、我々の心身を蝕む。少しずつ、だが確実に。たおれる度に、灰のような白い雪を舐めさせられた。担いだスキーはここぞとばかりに容赦なく肩に食い込む。今までの恨みを晴らすごとく。半死の状態でやっと緩々岳頂上に着く。そこはまるで仮装パーティーの会場のようは無機質な色が、ただ並んでいた。人々は仮面と衣で本性を隠し、ひたすら美しい軌跡を描こうとする。そう、まるで自分がこの世界の覇者であるかのように。白装束の「かごめかごめ」と仮装パーティーをしばし見物した後、会場を後にして下ることにする。バックリ口を開けた会場の出口は、そのまま天国へでも続いているかのようにだった。スキーで強行突破する2人を先頭に2の足で続く。傾斜が緩くなってきた所でスキーを着けてみるが、相変わらず相性が悪い。しかたなく歩いて行くことにする。下りは速く、彼らの付け入るすきはない。

御池はもう春のにおいのする風が吹いていた。最後にして彼らの祝福を受けたと思ってもいいのだろうか。心なしか湿っていたのは涙が混じっていたせいかな。これからは彼らの住めない季節になる。また来年会おう、今度は負けないからな、などと好き勝手に思いながらバスに乗り込んだ。

帰りの電車は、まさに地獄絵図だった。畜生道に落とされた人々が押し込まれた棺のごとくせまい車内で、6時間も立ちっぱなしを強いられた。夢の世界で遊びほうけてきた人々は、今また現実の世界へと引き戻される。それを望もうと望むまいと。そして人々はまたその身を削る。休みという糧を得んがために。この世界にあるほんの一握りの幸せは、何を基準に配られるのか。この世に人がいるかぎり、平等という言葉は飾りに過ぎない。人並を求めて、今日も電車は明日へ走る。(高橋記)





## 8908 白馬大雪溪ST

5/13~14 青谷 額賀

猿倉荘までタクシーで入る。林道しばらくで雪が出てくるのでスキーにシールを付けて行く。白馬尻小屋は形も無し。ほぼ大雪溪の中央部をダイレクトに登っていく。白馬主稜もまだ雪が豊富だ。葱平付近はデブリが押し出しており、急な雪壁になっている。スキーを背負ってキックステップで登っていくと、次第に緩やかになる。天気も不安定ながら晴間も見え、緩んだ雪面が輝いて美しい。村営頂上宿舎脇にテントを張る。疲れたので頂上往復はとりやめる。夜は低気圧通過で荒れ、朝は濃いガスの中。しばらく様子を見てスタートする。

頂上はあきらめ快適な滑降！というはずだったが、冷え込みで雪面はカチカチ。2、3度大きくターンすると、額賀が滑ってガスの中をカラカラと落ちていく。こりゃ下まで落ちたかと慌ててアイゼンに履き替えかけ下っていくと、ちょっとした平坦地に止まっていた。急な雪壁を慎重に下り、デブリの終わった辺りからやっとスキーをつける。天気も急速に回復し、快適な滑降を楽しんだ。額賀はストックを1本無くしたため苦勞していた。白馬尻を越え猿倉まで滑り込む。タクシーも来そうにないので、えいままよと林道を歩くことにし、二股まで2P。ここには不帰の見える露天風呂があるのだ。のんびり疲れを癒し、タクシーで白馬に出る。(青谷記)

## 8910 雪上技術講習会 立山：剣沢

5/25~28 額賀

文部省登山研究所で行なわれた雪上技術講習会に参加した。早朝に到着後、4、5人のグループ分けと荷物の分配を行い、早速、立山剣沢へ向かう。僕の参加したグループは高校の教師陣であったので、少々異色の存在であった。

1日目は剣沢にある研究所前進基地で帰幕。2日目は悪天のため予定を変更し、基地内で雪訓技術、医療、救助法等を講習する。3日目は快晴。すぐに雪訓を開始する。グループごとに内容は異なるが、僕達のグループはザイルワークの訓練、コンテ、懸垂下降、そして救助活動を行い、充実した1日を過ごした。そして曇一つない剣岳を目の前にして過ごしたことが、何よりもうれしかった。4日目は悪天の中帰還。ただ僕達のグループは立山山頂を経て帰る。強風と雪のため、意外とシビアな山行となる。きっと立山の遭難はこのような状態で、あの辺で起きたのだと、後で思い返すことができた。

全体的に講師の方がレベルが高過ぎて、受講生の方がついていけないような印象を受けた。技術向上を目指す人には、いい刺激になるかもしれない。(額賀記)

## 8912 両神山金山沢右股遡行左股下降 ／双子山中央稜

6/4 吉田 額賀

登山大系を読んで面白そうなことが書いてあったので出かけてみたが、沢はほとんど埋まっていて面白い所はなかった。左股の下降も特に問題無し。このまま帰ったのではわざわざ一泊までしてここに来た意味がないので、何か良い所はないかと考えた。まだ10時なので双子山辺りなら行けそうである。すぐに車を飛ばして双子山の登山口に行く。昼食をとり、すぐに登り始める。岩に取り付いたのが12時過ぎ。中央稜をつるべで登り、7～8ピッチもあったろうか、登り終えた時はかなり疲れていた。  
(吉田記)

## 8915 川苔谷逆川

6/30 額賀

友人と一緒にいく予定だったが、早朝待ち合わせ時刻を一時間過ぎてもこなかったので一人で行く。とりつきに少々手間取ったが、早速シャワークライムとなる。快適にのっこしていく。一人のため慎重になり、ザイルを出せば登れそうな所も高巻いてしまう。しかし全体的に良溪で、もう一度来てみたいと思う。(額賀記)

## 8916 笛吹川ヌク沢左俣右沢

7/2 上野 額賀

塩山のバスターミナルでシュラフ仮眠の後、朝一のバスで西沢溪谷へ。雨の中のヌク沢遡行。晴れていればさぞルンルン気分での沢登りであろう。秩父へと結ぶ雁坂トンネルの建設が始まっている。これが完成すればこの辺も変わってしまうだろう。  
(上野記)

## 8920 開聞岳

8/13 上野

屋久島での夏合宿の前、1日早く九州入りしたので足慣らしと開聞岳へ登る。立派な登山道を2時間程で登るが、さすがに南国の夏は暑い！頂上に着く頃には汗だくだく。麓の民家、車がまるでミニチュア模型のようだ。下山は1時間もかからぬ内にかげ下り、缶ジュースを一気に4本も開けてしまった。(上野記)

P. S. 帰りに寄った開聞温泉は掘っ立て小屋みたいな温泉で、とても良い所でした。  
開聞岳登山後は是非お勧めです。

## 8921 飯豊連峰

8/11~15 笠原 松原

8/11 川入 ————— 御沢小屋

磐越西線山都駅から列車でずっと一緒だった、高校山岳部の子たちと一緒にバスに乗り込み川入へ向かう。川入で昼食をとり、御沢小屋までの長い林道を歩き始めた。すると五分も歩かないうちに後ろからトラックがやって来て、私達の2、3m前で止まった。話を聞くと、今夜お世話になる御沢小屋の田中さんで、小屋まで乗っけていって下さることになった。御沢小屋は二本の大きな杉の木の横に建つ、小さな古い小屋だ。田中さんの薦めで大滝を見に行くことになり、先程の高校山岳部の顧問の先生とOBと共に道を進んだ。しかし、だんだん道が不明瞭になり、とうとう河原から先がわからなくなってしまったので引き返した。夕食時には小屋のおばさんに、とれたてのきゅうりとトマトを頂いた。また、わざわざきれいな毛布を用意して下さったので、気持ち良く眠ることができた。(ラジオはどの局も入らず、天気図を書けなかった。)

8/12 御沢小屋5:30 — 10:50三国岳12:00 — 13:50切合小屋

蒼の緑のジュータンの中に白や赤のきのこが生えている。気もちのよいブナ林を登っていくと、疲れた頃にちょうど下十五里に着く。中十五里は広く休憩にいい所であるが、下十五里からそれほどかからないので通過した。林の間から三国岳とその肩に三国小屋が見える。好調に上十五里に着いた。急坂が続くが、随所に休憩に適した所があるのが嬉しい。笹平を過ぎると雨水のせいか、道も随分えぐれてトンネルのようになっていた。そしてそのトンネルを3つ抜けると、そこは……横峰だった。最後の3つめのトンネルは長くて深いトンネルで、横峰に出た時は急に空が広がった。また笹

やトンネルの道を進み、地蔵山へ着く。飯豊本山から下ってきた人の話では昨晩は小屋は満員で、土間にゴザを敷いて寝るのも窮屈だったとのこと。ここから道は90度曲がり、三国岳への岩の道となる。樹林帯を抜けたので左右に景色が広がるが、飯豊の谷は今まで見たどの谷より深い様に思えた。三国岳の山頂はトンボの大群が舞っていた。ここまで来ればもうそれほど急坂もないので、ゆっくり昼食をとった。今山行の目的である高山植物を調べながら切合小屋へ向かった。

8/13 切合小屋5:50 — 9:10飯豊山10:10 — 12:00御西小屋12:15

— 13:15大日岳13:30 — 14:14御西小屋

雲の合間から日の出を拝み、飯豊本山を目指す。花を見ながら、もう顔見知りになったおじさやおばさんと抜きつ抜かれつして草履塚へ着く。新しいよだれ掛けを掛けたお地蔵さん越しに見える飯豊本山は、どっしりとしている。大日岳へ続くなだらかな稜線や、もう8月半ばだというのに豊富な雪渓を横目に歩みを進める。御前坂から0.5P登りつめれば飯豊山神社である。神社直下の一王子から東へ数分下ると、とってもしっかりおいしい水が沸き出している。おいしくて冷たい水を存分に味わった。昔からの信仰の山とあって飯豊山神社は古いものであったが、社務所はコンクリートでできた味けないものであった。

この先の山頂からはこれからの縦走路、飯豊連峰最高峰の大日岳、大日岳への丘のような山なみがずっと見渡せる。しばらく2人でこの景色に見入った。そして山というよりも丘といった方がふさわしい道を軽快に歩き始めた。大日岳は次第に雲がかかり出していた。丘(?)には様々な花が見られた。もう8月中旬なので花も終わりに近いようだったが、左側斜面の豊富な雪渓から冷たい風が吹き上げるせいか、雪渓の近くは丁度盛りといった感じであった。雪渓へ寄り道したり花を観察したりのんびりと歩き、お昼頃御西小屋へ着いた。御西小屋はその名の通り「避難小屋」だった。すぐにアタックの用意をして雲のかかる大日岳へ向かった。

チングルマの群落やニッコウキスゲやハクサンイチゲの咲く斜面を見ながら歩く。地図に一時間強と示されている大日岳はとても遠くに感じる。しかし、それは山容が余りに大きいため遠くに感じるだけのようで、一時間後にはちゃんと頂上に立った。運良く雲も切れ、梅花皮小屋まで見える。ジュースを飲んで写真を撮って復路についた。こちら側から御西小屋を見ると、とても山とは思えない台地のような丘陵にポツンと建っている。本当に飯豊は、今まで登ってきた山とは全く違う山容である。起伏の少ない緩やかな稜線。高山植物の咲き乱れる斜面。豊富な雪渓……。飯豊へ来た誰もが絶賛するのも頷ける。満足しながら、明日の天気を気にかけてながら眠りについた。

8/14 御西小屋6:05 — 9:40梅花皮小屋10:20 — 12:00門内小屋

夜中嵐の様な音がしたので停滞を覚悟していたが、とりあえずガスでおさまっていた。景色は何も見えないので、今日はただひたすら歩くだけである。天狗の庭までの道は少々わかりづらい所もあり、前を行く親子の跡を笹ヤブの中へ突っ込んだ。よく

歩かれている道とは思えないくらいに笹が茂っていて不安になったが、なんとか天狗の庭へ着いた。その先ガスの中を予想とはだいぶ違っていた御手洗池へ行く。大きな綺麗な池を考えていたけれど、雨のせいかわどんでいて、道の脇にこれといった特徴もなくあった。ガスはどんどん濃くなる。霧雨にはならないけれどしっとりと濡れる。だんだん体も冷えてきたので雨具の上だけ着た。烏帽子岳直下は、イブキノトラノオなどこれまでに見なかった花も出てきたが、見る気もおこらず先を急いだ。ガスの中から梅花皮小屋がぬっと現れた。やっとここまで来たという感じである。小屋の中は既にいっぱいだったので仕方なく外で休む。ガスが流れて時折、今下りてきた梅花皮岳や石転び沢が見えた。重い腰を上げて、今日の宿、門内小屋へ向かう。北股岳の登りでは横の笹の中からうぐいすの声がよく聞こえたが、探しに探しても見つかることができなかつた。北股岳を後にし濃いガスの中を進むうち、次第に雨が降り始めた。雨具の上は既に着ていたし小屋にもすぐ着くだろうとあまく見ていたら、雨はどんどん強くなり小屋にはいっこうに到着せず、びしょびしょになってしまった。小屋には一番に着いたので2階の隅を占領し、おしゃべりに花を咲かせた。水場は20分程下ったところで、しかも汚いとのことなので、今ある水だけでなんとか済ませることにした。明日、1ピッチも歩けば水場があるから大丈夫でしょう……。

#### 8/15 門内小屋5:30 —— 9:45飯豊山荘

起きた時に降っていた雨もやんで、ほんの一時ガスも切れて飯豊本山まで見えた。草のつゆで濡れるので雨具を着て出発。しばらくは緩く広い道を進むが、だんだん傾斜がきつくなる。どろどろでよく滑る道を木に頼りながら転ばぬように下りる。五郎清水で水を補給するつもりだったが、ジュースや果物がまだあり、水場までの道も悪そうなのでやめた。半分滑りながら下りてゆく。滝見場へ寄ったがガスで滝は見えない。とにかく急な坂をギャーギャーと下る。やっと湯川峰へ着いたが、この先も相変わらずの急坂。間違っても登りたくないし、二度と下る気もしない坂である。下に飯豊山荘が見えたが、ほとんど真下に見える。ここから真下の飯豊山荘へどうやって下るのだろうと思った。ただ急降下である。足が疲れて、だんだん元気もなくなって不平を言う気力もなくなって……やっと下山した。飯豊山荘まで歩くのもイヤで、すぐ目の前の河原でゆっくりした。飯豊は登ってしまえば緩やかな大きな山であるけれど、上に行くまでがどこを走ってもとても急である。それだけに心に残るものも多いのかもしれない。(笠原記)

付) 帰りの飯豊山荘から小国までのバスも、米坂線も、奥羽本線も、とてもとても良かった。

## 8922 穂高たたみ岩

### 滝谷第三尾根～ドーム中央稜

8/13～17 山田 他1

近年西朋もあまり岩には行かなくなった。と言う自分も大学2年の時に剣に行っ  
て以来、岩登りらしいことはあまりやっていない。それでもやはり一度は穂高を、と  
いうわけで大学のワングルの先輩で岩に目覚めている横溝さんに穂高に連れていっ  
てもらうこととなった。

8/13

横尾までの長い林道歩きを嫌って、岳沢からたたみ岩を登り奥穂を越えて濁沢に入  
ることにする。岳沢ヒュッテまでは2時間程度だが、夜行列車のビールと普通のトレ  
ーニング不足で何だか頭がふらふらする。こんな状態で岩登りをするのはしんどいな  
と思っても、前向きな横溝さんは許してはくれない。割と堅い雪渓をはうように登っ  
て取付き。しばらくはたたみ岩の名のとおり、広いスラブが続く。途中ルンゼ状の所  
で一度ザイルを出す。大岩をまわり込んで大まかにいえば尾根状の所を登ると、傾斜  
が緩くなって右ヘトラバースしていく。この頃ガスが晴れてくる。すると足下は広大  
なスラブが下の雪渓まで続いている。気分爽快ではあるが、滑ったらと思うと冷汗も  
んである。ここでルートของルンゼを見落としてトラバースしすぎてしまい、ザイル1  
P分左にトラバース。さらに草付きの斜面を登ってルンゼに戻る。このルンゼを少し  
登ると斜度の緩い尾根に出る。後はひたすら歩けば奥穂高の頂上である。岩にいる間  
は緊張していたから良かったが、そこから開放されると一気に疲れが出て、よたよた  
歩いてやっと頂上。奥穂山荘でビールを飲んでますますよたよたしながら夕闇迫る濁  
沢ヒュッテへと下る。

8/14

今日はいよいよ滝谷へ向かう日である。ルートは3尾根からドーム中央稜。まだ暗  
い中出発し北穂南稜から稜線へ、そしてC沢下降点に着く。今年は残雪が多くC沢の  
下降もどうかと思っていたが、稜線から見た所雪はなさそうである。これはラッキ  
ーと重い山靴をデポし運動靴で降り始めるが、これが大間違い。やがて沢は雪渓とな  
ってくる。雪渓の下をくぐったり、アイスハンマーでステップを切って雪渓を渡った  
りして何とか降りていく。が、もう少しで二股という所でどうしようもなくなって、  
アップザイルとなる。下降が悪いせいか3尾根に取付いているパーティーは1つも  
なく、回りを見ても4尾根に1パーティー取付いているだけである。おかげで有名な  
滝谷の落石の洗礼を受けずに済む。赤いガリーの下でザイルをつなぎ、横溝さんトッ  
プで降り始める。そして4P目、3尾根の核心部である。尖った岩から壁に移り、こ  
れを回り込む。この辺りの高度感が素晴らしい。あとは何事もなくCドーム中央稜の

取付きである。ここは山田トップで登り出すが、肝心のチムニーの直下でびびって横溝さんにトップを変わってもらう。そして3P目、またトップとなってフェースを登る。このピッチの最後がホールドが細かくヒイヒイ言いながらなんとか乗越すと、次のピッチは易しくほとんど歩きと変わらない。そして5P目、またまたトップで登るが、残置ハーケンに誘われて右へ行ったり左へ行ったり。我ながら情けない。最終ピッチは最後のトラバースが厳しいが、そこはセカンドの気楽さで何とか越えて終了。

8/15

2日間の疲れがどっと出て今日は休養日。のんびりと雲を見て過ごす。

8/16

横溝さんが今日下山する。入山時同様横尾からの林道は歩きたくない。と、言うわけで一緒に前穂の北尾根を登り、前穂の頂上で別れることにして出発する。VⅥのコールまでは割とあっさりと着く。ここから細い岩稜を左右の景色を楽しみながら登る。3峰のチムニーは少し緊張するが、格別困難もなく前穂にたどり着く。ここで岳沢に下る横溝さんを見送り、奥穂へと向かう。この後どうしようかなと思ったが、まだ時間も早いしせっかくだからと、北穂を回って瀧沢に戻ることにする。さすがにこの稜線は人が多く、待つことも多い。途中思いがけず大学の後輩が親父さんと来ているのに会う。幸運にも彼が運び上げていたスイカを分けてもらい、喉を潤す。このスイカ、3人では食べきれず通りがかりの人にも分けてあげた。全く彼は偉いといしか言い様がない。彼らと別れて少し疲れが出る頃、北穂高岳に着く。後は瀧沢へと下るだけ。

8/17

昨日まで天気は割と良かったが、今日は朝から雨である。下山日はこんなもんかと思いながら上高地の人ごみの中へと向かう。

今回の山行は夏、それもお盆の頃といった割には岩自体は人も少なく、非常に静かな山登りが出来て良かった。ただ自分の岩登りの下手さをつくづく思い知らされた山行であった。がんばらなくっちゃ。(山田記)



## 8923 夏合宿 屋久島瀬切川

8/14~19 青谷 上野 額賀

8/14

3人3様、鹿児島港で早朝合流する。お盆前で混雑する船に乗り込む。船上でさんざん酒をおごられる。(サツマ人はスゴイ!) 開聞岳が見えなくなると、遙か洋上アルプス屋久島の島影が迫ってくる。宮ノ浦よりバスで栗生へ。カッとする暑さに目の前がくらくらする。昼飯を食べてトポトポ林道を歩き出す。途中大川三滝を右手に見て、海岸沿いに行くと瀬切川の谷に出る。河口より忠実にとどることにし、海岸の岩場をビバーク地とした。海につかって涼をとる。

8/15 くもり

あふれ来るソーダ水のような瀬切川に一步を踏み出す。瀬切橋を抜けていくと兩岸狭まり、滝が断続的に現われる。すぐ胸までつかる徒渉の連続。滝は水量が多くの上りした巨岩にはばまれていて容易に直登出来ない。大きな屈曲部を右より大きく巻くと、間も無く巨大な直深。40mの瀬切滝。風圧が嵐のようだ。少し戻って右岸の急なプッシュにザイルを使ってルートを伸ばす。高巻きは下草が少なく根も多いので比較的楽だが、この高巻きは恐ろしい。ようやく落口に抜ける。ここより巨岩が終わり、岩盤が顕著で沢もまとまりを見せる。巨岩の上でビバークとする。

8/16 くもり、ときどき雨

ゴルジュが断続的にあり、10m級のトイ状滝がいくつもある。右に左に巻きつつ進む。右手高く林道の切り開きを見る頃、スラブ帯に変わる。雨がポツポツ降り気分はもうひとつだが、予想外に続くスラブ滝が素晴らしい。まもなく平瀬になる。沢の傾斜が無くなり、原生林帯のとうとうたる流れである。折からどしゃぶりのスコールとなるが、心ゆくまでずぶ濡れになるのもまた快感である。屋久杉の原生林帯となり、苔むす岩、川岸を被う緑、はっとするような巨木。屋久島の沢を実感する。倒木も腐っておらず、屋久杉の緻密さを感じさせる。水流が細くなり出した、しっとり水を含んだ苔のじゅうたんでビバーク。

8/17 晴れ

名残りの小滝をいくつか越えるうち左巻き大滝に出会い、いつしか縦走路に飛び出す。久しぶりの青空が目まぶしい。永田登山道をしばらくたどると大川源流を渡る。ここから大川七ツ渡をたどってみることにする。いくつかの小滝の後、谷の傾斜もなくなり庭園風景となる。陽に輝く水流、様々な苔、ポットホール、屋久杉の枯木があちこちに配置され、まさに仙境である。じゃぶじゃぶと水流をたどるうち、鹿ノ沢小屋脇に出る。この小屋周辺は途端に人臭くなるのが残念。草原で静かな時を過ごす。



鹿が白い尾を見せて飛び跳ねた。小屋泊。

#### 8/18 晴れ

永田岳まで1P。左にローソク岩を見る。点在する花崗岩とクマザサの緑のじゅうたんが朝日に輝いて素晴らしい。宮ノ浦岳山頂を往復して高塚小屋に向かう。登山道は最初ササが覆って歩きづらいが、中腹まで降りてくる。太い屋久杉も見え始め、歩き良くなる。また谷線には必ず水が流れており、水筒いらずを実感する。偉大な縄文杉、巨大なウィルソン株、大王杉など1つ1つ感嘆していくと、小杉谷のトロッコ道に出る。まもなくどしゃぶりの雨。午後は必ずスコールがあるようだ。楠川登山道に入り、白谷小屋に泊まる。

#### 8/19 晴れ

2P程下れば楠川。安房の方へ15分程の村営の温泉でフィナーレとする。ここはお薦め。濡れ物を乾かし、ゆったり温泉につかる。気分は何とも言えない。タクシーを呼んで宮ノ浦。額賀、上野は船で鹿児島へ。額賀は開聞岳や霧島に立ち寄った。青谷は永田の民宿に1泊して屋久島の海に遊ぶ。離島の人達はよく、「この島は何もない」などと言うものだが、屋久島の人達は「この島は最高だ」と言う。屋久島の豊かな自然と人々に触れて、移り住む人達の気持ちがわかる気がした。(青谷記)

### 8924 会津駒ヶ岳下ノ沢

#### 8/19~20 遠藤 吉田

久々の遠藤氏との山行は、早朝の浅草駅から始まった。と、いうわけで今回は2人だけのミニ夏山行(合宿とは言えない)である。と言うのも、私自身社会人1年目で夏休みがあまり多く取れないことと、遠藤氏が大きな休みが取れないことで一致したため、本当の夏合宿には参加できないためである。

槍枝も便利になったもので、早朝東京を発せばその日の昼過ぎにはもう入谷できてしまう。バスの乗客のほとんどは尾瀬へ向かうハイカーで、下ノ沢に入谷するのは我々だけであった。バスを降りてすぐに右に入る林道をたどる。しばらくして登山道に入り、流門の滝の見える高台に出る。そこから沢に降り、溯行を開始する。特に問題となる所もなく二俣に着く。ツェルトを張り釣りの準備をするが、水が少なくなっていてどう見ても釣れるとは思えない。すぐに釣りをやめてたき火を始め、夕食を作り出す。途中雨が降り出したが、ゆっくり休めそう。次の日も天気は良い。すぐにゴルジュが始まり、5~10mの滝が連続する。2回ほどザイルを出したが、非常に快適な登りである。やがてお花畑の中を進むと、駒ノ小屋のすぐ下に出る。沢の静けさとは対照的に登山道には多くのハイカーがいたのには驚いた。(吉田記)

# 8930 外山沢川緑沢 ～奥鬼怒根名草沢下降

10/8～10 青谷 額賀

10/8

東武の夜行列車で日光へ。早朝のバスで赤沼下車。柳沢林道をたどる。途中、草紅葉の小田代ヶ原などを見つつ、峠を越えると外山沢川の凹地になる。歩道の橋の下より沢に入る。ゴーロ帯しばらくで二俣。荷を置いて庵滝を見物に行く。直瀑で美しい弧を描いている。緑沢に入ると次第に傾斜が増し、小滝の上、右手高く一ノ滝が落ちてくる。左の溝より簡単にパス。目の前に二ノ滝。ホールド豊富な右壁をザイルを出して直登。続くナメ滝もザイルをひきずってルートを伸ばす。二段四ノ滝は流心を直登。上段は右手より巻き気味に登る。濡れると非常に冷たい。核深部はここまで。溝状になった沢に小滝がかかるのみ。下草の少ないダケカンバ林になり、どんどんつめて行くと稜線に出る。折からアラレが降りだし、小雪の舞う中を前白根を越えて避難小屋に入る。

10/9

快晴。初雪を冠った奥白根に登り、五色山より金精峠をたどり、静かな縦走を楽しむ。根名草山手前の鞍部から右手に下り、根名草沢源頭に降り立つ。時折り小滝が現れるが問題なく、大崩壊壁などを見つつ、おだやかな河原にテントを張る。

10/10

水量豊かな流れをたどる。上ノ黒沢を入れると柱状節理の10m滝。右手より楽に下れる。オロオソロシ沢の連瀑を左岸より入れると、間もなく登山道に出会う。日光沢温泉で、真っ青な空に映える紅葉を見ながらの露天風呂とビールで乾杯。奥鬼怒で何とか昔の雰囲気を残すのは、日光沢と手白沢のみらしい。すっかり観光地化した林道をたどり、女夫淵よりタクシーで鬼怒川温泉に出る。(青谷記)



## 8931 南大菩薩

10/14~15 高橋

10/14 立川8:31-9:44初鹿野9:50-13:30湯ノ沢峠避難小屋(泊)

かねてよりの懸案だった南大菩薩南部を遂に個山でやれることになった。大菩薩は小金沢連峰や大菩薩峠周辺が相場だが、ただでさえ人の少ない南部も悪くない。たった一人というのが下界では心配されたが、そんなものはどこ吹く風で、天候や道の状態に最高に恵まれた10月の締めくくりとして言うこと無しの山行となった。(さて、ここまでの文章でピンと来た方は鋭い!心当たりのある人はこの文章の元となった某先輩の文章を探してみよう!)

出発日、立川駅集合。大学受験ならいざ知らず、軽いアタックをしょって中央本線とは変な感じ。この山域はアプローチだけは超楽で、荻窪駅で乗車、立川で甲府行きに乗り換え、初鹿野っていうちゃちな駅に連れてかれる。更に駅からバスはなく、長い林道歩きを前にして、いささかバテの感あり。今日は朝から晴れでしょっぱなからTシャツになり、明るい感じで出発。林道はたらたら歩く。一汗かいて景德院を通過してしばらく歩いた時、道路工事オッサンから耳より?な話。今より数年先に、この林道は向こう側の林道に開通しているとのこと。(バスも通るらしい)恐れていた林道歩きやポッカの負担も軽減される可能性大で、思わずほくそ笑む者もいることだろう。小屋手前の急斜面にてこずったが、何とか湯ノ沢まで登り着く。一旦ポロポロになった避難小屋が再び改築されていたので、今日のところは幕営せずに開放されている小屋を利用することにする。結局、夜半から天気は崩れ始めた。

10/15 起床3:30-出発6:00-7:00大倉高丸7:10-7:30破魔射場丸7:40  
-8:30米背負峠8:35-9:00大谷ヶ丸(ルーファイミス)10:10  
-11:30滝子山12:10-14:18初鹿野

曇り空の下、次第に草原の広がる登路を大倉高丸へ。山頂直下まではなかなか急登で長く感じた。タオルを握りながら大倉高丸まで一投足。草原を従えた主稜線は流石に景色が美しい。そして金色の世界に心は軽やか。大倉高丸頂上で遠い富士山や地味な大谷ヶ丸などの大展望を収め、いよいよ縦走開始。破魔射場丸までのヤブ稜線は快適に進み、ちょっと立ち寄った天下石では破魔射場丸とはちがって、大きな岩が目を楽しませてくれた。途中で幾度となく道を外した。ヤブがいささか濃いようだ。私も負けじと今日の滝子山までのアルバイトを考慮して、行けるところまで午前中に出来るだけ進んでおくことにする。深いヤブコギを覚悟していた低い尾根に入ったが、始めこそ苦しんだもののすぐに楽になった。道ができていて、ササヤブで大変だった破魔射場丸下りよりかえって歩きやすくなっている。涼しく快適な陽射しの下、予想外にはかどって米背負峠まで来てしまった。何にも展望のない、うっそうとした峠でレスト。気分は上々。大谷ヶ丸へ向かう。歩きやすい1本道を快適に進む。ヤブが無

いので助かった。樹林の中をのっぺりした大谷ヶ丸頂上に到着。意外に早かった。

ここから滝子山は目と鼻の先のように、実際にはかなり時間がかかった。うっそうとしたササヤブをかきわけ、何度も道を外し、遂に南の果て滝子山登頂。何の変哲もない一方向が開けた樹林の小ピークだが、感慨深かった。西方に目をやると、近くに富士山がガスに隠れて見えなかった。下山路、つつじヶ丘の辺りで中高年登山者軍団を目撃。ここの平原は夏は誰でも登ってこれるし、何といても人だらけなのがいや。また来たいものか。この日は初狩駅まで歩く。灰色の高速道路が行く手に迫る。ここでの景色は絶悪だった。(原文の24、25日はつごうにより省かせていただきます。) 個山最後にしてはかなりの林道を下って駅へ。駅近くの店で食べたかつ井のうまさ的印象的だった。立川直通の1時間半余りの電車の中で、今日までの登高が悪夢のように思い出された。(高橋記)

## 8935 表妙義

11/18 吉田 他5名

妙義神社の右から登り始め、大の字に着くとそこからすぐにくさり場が始まるが、特に問題もなく白雲山に出る。その後道に沿って歩き、タルワキ沢を下り、合計4時間。いいハイキングでした。(吉田記)

## 8936 戸隠連峰 西岳 P1 尾根

11/25~26 上野 額賀 他1

11/25 宝光社6:10 — 上楠川7:00 — 天狗原上部9:05 — 10:45幕営 (JP手前)  
天幕11:40 — 蟻の戸渡り手前13:30 — 引き返し — 天幕15:15

夜行で長野入りし、タクシーで宝光社まで入ってもらう。楠川沿いの道を行き、左の尾根を上がるのに道が分からず一苦勞。台地上の熊笹の中を行くと、造成中のゴルフ場の隅に出る。「山道」というカンバンに従って登って行く。所々に雪が付いており、尾根筋を行くようになる。この先天幕場は望めそうもないので、昼過ぎに早々と尾根上の脇にテントを張る。

中途半端な時間なので、空身でこの先行ける所まで行ってみることにする。”熊の遊び場”を過ぎ、岩の裾を縫うようにして道は続く。所々Ⅲ級程度の岩登りとなり、不安定に雪が付いており少々緊張させられる。”無念の峰”の先で懸垂下降をするとすぐに”蟻の戸渡り”となる。ものすごいナイフエッジで両端は奈落の底まで切れ落ちている感じ。時間も迫り、今日はここまでで引き返す。

11/26 起床7:00 — 出発8:15 — JP9:30 — 11:40 P1 12:00

— 13:45天幕14:15 — 宝光社16:30

空身で昨日の道を再び行く。“無念の峰”からの懸垂下降は雪が多く、戸隠特有のキノコ雪が出来るようになると支点にかなり難儀しそうな所だ。“蟻の戸渡り”はアンザイレンで慎重にクリア。あと、ほんの一投足でP1頂上に立つ。遙か彼方の北アが雪をまとい光輝いている。ここ戸隠は北アの絶好の展望台だ。反対側には本院岳ダイレクト尾根が猛々しくそびえ立っている。下山も要所所でアンザイレンして慎重に下る。下山後の戸隠そばがうまかった。(上野記)

## 8939 雪訓 阿弥陀岳南稜 ／裏同心ルンゼI - C

12/9~10 青谷 額賀 内倉 高橋

12/9

茅野からタクシーで、林道を行ける所まで入ってもらおう。歩きだして1ピッチほどで旭小屋。ここから尾根に取り付く。トップの額賀氏は快調に突き進んでいく。次第に雪が深くなり、樹林を抜けた辺りでは、膝まで達していた。ここでRとなるが、雪が本格的に降り始める。晴れていれば快適そうな尾根道を、アイゼン装着で歩き始めた。やがて、岩稜帯が現われ、とうとうP3に着き、ザイルの登場。青谷氏がルートを選んでいいる間に、我々は不注意でメットを谷底へ落とす。技術の修得を怠っている筆者は、もがきながら登った。晴れていたら足がすくんでいたことだろう。P3を抜け、20分程で、思いがけなく阿弥陀岳山頂に到着。視界は全くない。テントを立て、中にもぐりこんだ途端に、辺りは真っ暗になった。

12/10

翌朝、外は360度大展望が開けていた！ド快晴の頂上。最高の気分であった。鞍部まで慎重に下り、赤岳鉱泉に向かう。そこから、裏同心ルンゼ・アイスクライミングに出発。初めて氷深に触れた筆者は、崩れないかと心配したが、そんなことよりアイゼンとダブルアックスで体を支える辛さを思い知った。とにかく登るだけで激しい疲労を覚えた。荷物もないのに初心者2人は疲れてしまった。何本か登ったところでルンゼを離れ、かなり急な斜面をトラバースして尾根道から下山。鉱泉からは走るようにして美濃戸へ向かった。初心者の私にとっては充実した山行だった。(内倉記)

## 8942 冬合宿：海谷駒ヶ岳S T中退

12/31~1/2 山田 上野 額賀 高橋

12/31

その女は雪と共にやって来るという。雪ん子？雪女？その姿を見た者は、その妖艶な仕草に魅入られて、その命をもて遊ばれる。今日も雪降る幽遠な聖域で、幽艶なその姿を踊らせていることだろう。

昨日までは西高生と共に人工的に美しく飾られたグレンデで、その大自然の嗚咽をいやというほど聞かされていた。人々はその声が聞こえないのかそれとも聞こえない風を装っているのか、無頓着にその刃を大地の懐に刻み付けていた。その後グレンデを離れ直江津（田舎）に泊めてもらい、次の朝一番の電車で合宿に間に合わせるべく糸魚川駅へ向かう。泊めてもらった夜の天気はすこぶる機嫌が悪く、その強い風と共に低く垂れ籠めたどす黒い雲は、今にも地上を押し潰しそうだった。その機嫌は今だに良くなっていない様相で、朝から血のように妙に生暖かい風を何処へ狙うともなく吹き付けていた。風に踊らされているかのように波打つしぶきが、電車の窓から見下ろす真冬の海から、重い空に押し潰されそうな弱い心の中に迫り来る。こうべをうなだれた死刑囚のような人々を見やりながら、その灰色に濁った冷たいホームに降り立った。たしか糸魚川駅と書いてあったように思える。餌に飛び付く餓鬼のようにストロブにまとわりつく人々の中に、先輩たちの山スキーは無造作に立て掛けてあった。ほどなく先輩たちもやって来て、いよいよ修羅が始まるようだ。これから足を踏み入れる魔性の聖域のことを考えると、飲み込む唾も心なしか苦く感じた。外は雪ひとつない。しかし妙に寒い。バスに乗る頃にはその重厚な黒天井から、ちりのような申し訳程度の雪が舞い始めていた。何時しかその雪もポタ雪と変わり、バスを降りる頃には吹雪模様になっていた。降りた所は既に一面の灰色の世界。そう、その雪は白くはないような気がした。何か灰色の雪だったように思える。すべてが色をなくして、ただの無彩色のもの淋しい空間となっていた。”その女は雪と共にやって来るという。”ふと頭の中を知らない言葉が横切ったような気がした。まさかな……。自分をだますことはいくらでも出来る。ただ真実から目をそらせばいいのだから。

完全装に身を固め、人っこひとりいない灰色の道を何処までもいく。しばらく行くと雪の量が増えた。どうやらスキーでいけそうだ。先ほどから滑りたがっていたので、スキーの奴も嬉しそうだ。しかしその泣き崩れた青白き女の化粧のような湿っぽいポタ雪は、まるで裾にすがりつく白装束の腕のように我々を放そうとしなかったので、トップを交代しながら進まなくてはならなかった。しばらくは膝下位のスキーラッセルが続く。辺りは時が凍り付いたかと思えるような灰色の静寂に包まれていて、淡々と舞う雪は、我々の存在を否定しようと思死になっているかのように、その軌跡を灰色の絵具で消し去っていった。途中で出喰わした廃屋のもの悲しい空間の叫びは、そのまま”あの女”の叫びとして耳に雪崩込んで来たかに思えた。胸が苦しくなるよう

な息詰まった空気をかき分けて進むと何時しか林道が終わっていて、そのまま樹林中へ突入した。しばらく全てを飲み込むような深く寂しい樹林の中をルートを探しつつ登ると、またもや林道に出くわした。我々は既に“あの女”の掌の上で踊らされているに過ぎないのだろうか。ふと不安がよぎる。それを知ってか知らずか、何事もなかったかのように緩い風が一吹き吹き抜けていった。この林道はさっきのとは違う林道のようなのだ。敷き詰められた白いカーペットを血塗られた足跡で汚すように進むと、期せずして尾根の取り付きに着いた。相変わらず吹き抜ける風は我々の進入に難色を示し、冷たくかたくなに通り過ぎようとしている。

その尾根はいわゆるヤブ尾根だった。その密なるヤブもまた、我々をかたくなに拒否していた。どこから取り付こうかしばらくウロウロしてみるが良さそうな所はなく、しかたなしに強行突破してみる。が、その細い腕は見かけとは裏腹にものすごい力で我々を絡め捕る。何千何万という腕に阻まれるがごとく押さえ込まれた我々は、ただ無言で引き返さざるを得なかった。取り付き点までもどった我々を待っていたのは、ただ無機質にあざ笑う木々のざわめきのみだった。その日はどうしようもなく、とりあえずテントを張った。相変わらず白き足枷は、その重苦しい黒天上から情け容赦なく舞い降りてくる。空にいる内は天使を装っているが、一度地上に舞い降りたら最後その本性を表し、遮二無二の足にしがみついてくる。人も雪も同じような者であるかのようにさえ思えてくる。

明日に備えてカラ身でルート偵察に行くが、雪が少ないせいかずっとヤブ尾根のようだ。堆く積み上げられたヤブ達の嘲りを聞いた気がした。明日の天気はどうであろうか。詰まる喉を無理矢理奮い立たせて、そのスポンジのように食べにくい飯を押し込んだ。期待という言葉はもう口にすることが出来ない空間に置き去りにされてしまったようだ。寝ることさえも煩わしい。

1 / 1

息苦しさに無理矢理目覚めさせられた。悪夢の続きはもうすでに始まっているようだ。テント全体が白装束に被われている。もう少しで埋まりそうだ。急いで外に出て、スノスコで掘り出す。テントにまとわりつく白い者のせいで、中は酸欠状態であったようだ。“あの女”はどうやら我々を殺す気だったらしい。危ない危ない。急いで飯を食い、早速戦闘準備開始。テントをベース基地とし、カラ身でアタックを仕掛ける。失敗すれば逆に我々の命が危ない。殺るか殺られるか二つに一つだ。得物は山スキーとピッケル、アイゼン、ワカン、それにザイルと登攀用具一式もある。これだけあれば大丈夫だ。怯える心をだましつつ出発する。陣形は縦一列。先頭は交代で進む。しばらくはスキーヤブコギラッセルが続く。先頭の戦闘は凄まじく、何千何万もの細い腕をかき分けつつ進まねばならない。だいぶ登った所でその攻撃は密度を増した。もうこれ以上スキーを使うのは無理だと判断から、やむを得ずその場にスキーをデポすることになる。得物をスキーからワカンに変えた途端に、“あの女”の攻撃はその強さを増した。足が埋まる。いや足だけではない。胸まで埋まる。しかも壁のような

急斜面。嘲笑が響く。しかし負けじとヤブコギ胸ラッセルを続けるが、その赤ん坊のようにやわらかく、しかし死体のように冷たい真っ白い絹の織物は、我々を抱え込み放してはくれなかった。目の前の白き者を切り崩しては登り、切り崩しては登る。いくら崩しても切りが無い。その白き者は無限にいるようだ。天井の機嫌も女心のようにコロコロと移り行く。雪、晴、曇、雪。弄ばれるのは何時の時代でも男である。寒かったと思ったら熱かったり、精神的にも肉体的にも追い詰められていく。作戦が甘かったのか？ふと、不安が過る。その空間の全てが”あの女”の意思に支配されているかのごとく、我々は翻弄されるがままだった。

それでも神に逆らう虫ケラのように這い蹲って何とか進むと、ついに最後の砦、頂上直下の「大逆三角形」を臨める所まで来た。横には牙のような「十一面カネコロン」を従え、それはまるで全てを飲み込む邪悪な口のように我々を食らおうと待ち受けているかのように見えた。それでいて、それはまるで全てを包み込む柔らかな暖かい女の懐のようにも見えた。”あの女”は誘っていた。「来なよ、ここまで来てみなよ」風に乗って、その声は耳まで届いた。霞み行く景色の中、「大逆三角形」は触れてはならない秘部のような、淫靡な甘さを醸し出していた。このまま進むのは危ない、誰もがそう思い始めたころ、時間は限界の時を告げようとしていた。喜ぶ心とは裏腹に、体は軽い落胆の息を漏らしていた。撤退の準備に取り掛かった。その秘部の奥に潜む謎の頂上を想像しつつ、逃げるように帰幕した。去り行く背後からは、勝利の含み笑いが追い立てるように聞こえてきた。明日、晴れたらもう一度アタックを敢行する。しかし、「大逆三角形」は触れれば雪崩そうな気配だった。触らぬ神に祟り無し、昔の人はよく言ったものだ。

## 1 / 2

その朝は白き者の舞で始まった。誰もが心の中で喜びつつ、表面的には悔しさを装っていた。基地を撤収し、ふと空を見上げると頂上付近のみ雲が架かっていた。最後までその表情を見せないつもりか。負けた屈辱を下山と言う微温湯でごまかし、魔性の聖域を後にする。そんな敗者にさらに追い撃ちをかけるように、濡れたテントは肩に食い込む。しかしシールを外したスキーは良く滑り、下までずっと林道なのも手伝って、あっけなくバス停へ。見上げる山は、まだその素顔を見せてはくれない。バス停前のスキー場で憂さ晴らしをするが、気持ちは晴れはしなかった。

心に蟻りを残して、今回の山行は終了した。結局その正体は依然謎に包まれたままだ。しかし、もしその姿を見ていたら、今ごろはこの文章を打っていなかったかもしれない。人は何故命と引き換えにしてまでも手に入れようとするのか、知ろうとするのか、たどり着こうとするのか。そうやって死んでいった者は数多くいる。しかし誰もやめようとはしないし、とめようもしない。死ぬ時はそれが町で歩いている時だって起こるんだ、誰かが言う。これは運命なんだ、何処かで呟く。死にたくない、何かが呻く。その輪に取り込まれないように生きているつもりが、別のもっと恐ろしい輪に取り込まれていることに気付かずに、人々は今日も生き続ける。(高橋記)



## 8945 伊豆天城山

1/14~15 額賀 他1

午後発一泊の楽しいハイキングコースであった。夕方に峠に着き、夜行山行となった。月明りを頼りに八丁池に着いたのは、9時過ぎであった。しかし、月に照らされた八丁池はロマンチックなテント場であった。翌朝は、ほとんど平坦な道を快適に進む。気持ち良かったので、バス停からさらに3Pほどかけて海まで下ってしまった。(額賀記)

## 8946 西丹沢：沖ノ箱根沢IC

1/28 上野 額賀

前夜の内に大滝沢の出合まで入り幕営する。やや冷え込みが弱い感じ、明日ちゃんと凍っているか心配。

翌朝、テントを撤収し草むらにデポして出発。しばらく登山道を行き、マスキ嵐沢出合を過ぎたあたりで道標に導かれ、川原に下りる。しばらく行き、左手から大きな口を開けて出合う沢が沖ノ箱根沢。F1.25mは流心をアンザイレンして快適に登って行ける。F2.5m楽勝。F3.25mは階段状で楽しく登る。しばらくしてF4.30mが行く手をふさぐ。先行者がいたのでしばし見物。この滝をフリーソロで登り、クライムダウンしている人がいた。拍手！！ようやく我々の番が来る。額賀トップで登る。上に行くに従い氷が薄くなってゆきヒヤヒヤしながら登る。この先面白そうな滝もなさそうなので、大休止ののち下のF3、F2で遊んで下山する。この大休止で腐ったリンゴを食べた額賀にとっては、帰りの小田急は修羅場でした。(上野記)

## 8947 美ヶ原スキーツアー

2/3~4 額賀 他2

美ヶ原～霧ヶ峰まで縦走の予定であったが、ガス等のため美ヶ原のみとなった。しかし2月の悪天の中で、なかなか楽しいスキーツアーができた。三城牧場から茶臼山を目指したが尾根を一本取り違え、悪雪の中奮闘後、帰幕。翌朝、茶臼山から高原を経て王ヶ城に行く。さらに林道を5Pほどで下り、バス停に着いたのは7:30過ぎであった。しかし、運良く友人の車が迎えに来ていたので、すぐ温泉に直行できた。

(額賀記)

## 8948 北八ヶ岳：白駒池スキーツアー

2/3～4 高橋

額賀先輩が楽しくスキーツアーをしたところ、オレは泣いていた。初めてのテレマークスキーなので、とりあえず簡単な北八ヶ岳を選んだ。初日、波の湯から高見石を目指すも、いきなりラッセル。昨日までの雪でトレールは埋まっている。おまけにシールを持ってこなかったとくれば、とうぜんワカン攻撃。しかもさっきまで晴れていた空も、どんより曇ってきた。風が容赦なく、顔面にラッセルした雪を吹き付ける。目が開けられない。やっと高見石に着く頃には、とうとう雪模様。初めてのテレマークでおおごけしながら、白駒池に着きテントを張る。その頃になると大雪になる。暇なので池の上を滑って遊ぶ。寝る頃にはさらにボタ雪。明日が心配。

翌朝はいまいちの天気。やる気も失せて、予定してた雨池ツーリングもやめて、そそくさと下山。林道ひと登りで麦草ヒュッテ。こっからは、超楽の世界。下りの林道を約1Pでメルヘン広場へ滑り込む。これがなきややってられないよったく！ここからバス停までたらたら歩く予定が、下りの途中で会ったクロカンのにーちゃんに車で乗っけていってもらうことになった。ラッキー！しかも帰りの途中で、原村のクロカンコースに連れていってもらい、2重にラッキー。周回コースを滑り、そのあとは小金井駅まで車で送ってもらってしまった。天気じゃ見離されたが、なかなか楽しい山行だった。（高橋記）

## 8949 御坂濁川IC敗退 ／三ツ峠コウモリ沢IC中退

2/18 青谷 上野 額賀

芦川の濁沢を登ろうと、レンタカーで前夜の内に濁沢出合いまで入る。翌朝、万全の準備で濁沢に挑むが、いきなり現われるF1は全くの氷結も見ることができない。とって返して、車で峠越えをしてコウモリ沢へと向かう。三ツ峠登山口で車を捨てコウモリ沢へと入り込むが、ここも流心に氷結を見ず岩肌に薄っぺらに氷が付いているだけ。しばらく沢の中を進むが、アイゼン登山靴での沢登りになりそうなので引き返す。時間的にも、もう昼過ぎ。帰りは道志経由のドライブとなった。（上野記）

## 8950 大渚山～姫川温泉スキーツアー

3/2～4 上野 額賀 高橋

3/2～3 新宿23:20 — 5:52南小谷 — 中土7:01 — 7:21田中下7:50  
—11:30大渚山(幕)

待ちに待った山スキーの季節だよ。正月合宿の山スキー(ラッセルヤブコギ)にやられたからね。今度こそまともな山スキーが出来るかと思うと嬉しいね。

例のごとく西朋の集合は悪い。今回は上野氏が会社にはまり、1日遅れて後を追うそう。追いつくのだろうか。電車を降りた南小谷はスキーヤーのたまり場だよ。おめーら遊んでばっかじゃねーよ、と言ってやりたいが我々も遊び(?)であった。さらに電車を乗り継いで中土へ。そこで今度はバスに乗り田中下へ。ゲー!!!マジピョーン!+ジーマーデ、な世界が我々の目前に広がっていた。「ゆ、雪がなーい」正に絶叫もん。今年は雪不足だけど、いきなりこりゃないよなー。

スキー担ぎ開始。しょっぱなは段々畑の中の腐れ雪ラッセル。雲が多いくせに陽射が容赦ない。もう少し雪が多ければスキー使えるのに。やっとスキーの使える所に出た。あと少し遅かったら、へろへろにバテていたところだ。「よーし、スキーで滑った跡もあるゾ。こっからシール登高だー。」 気合い十分、出だしは快調。なるも、だんだん急になる斜面。泣きの入る斜登高を繰り返し、最後はスキーを脱いで一登り。広い斜面へ出る。こっからはずっとスキーで行けるよ。途中、上野氏のために道標的な物をガムテープでもって付けてくる。こりゃ、見付かるかね。そうこうしている内に雪がちらほら。頭がカラッポになるようなクラストした急斜面を越えると、あっけなく頂上。展望なし。テントを張って上野氏を待つ。3時間程後、上野氏あっさり到着。「いやーさすが早いね。」 時々ガスが切れて景色が見えるが、期待していた北アルプス方面は皆無に等しい。やれやれ。メシ食って寝る。

3/4 起床4:00 — 出発8:00 — 11:30横川林道11:40

— 14:40雪終了(大綱集落) 15:05 — 16:00姫川温泉(解散)

起きると雪と風。またもや神様に見離されたよ。さっそく滑降開始。しかし視界がきかない。樹林の中はまだ良かったが、木の無い所へ行くとホワイトアウト!地面と空の境さえわからない。大げさじゃなくて本当の事だよあんた。「あー豪快なダウンヒルはいずこ。」 地図とコンパス頼りに下る。しばらくしてガスを抜けた。下の方に林道らしきものが見える。それにしてもターンてむずいね。林道に出ると今度はクロカン地獄が待っていた。「救われねーなー、ほんと。」 まっっっっっっったく滑らないのさ、この林道。ほとんど引きずりまくって進む。背後に雨飾山がでかい。陽射が強い。なぜか太陽の所だけ雲がない。「あぢー」 途中、雪崩の跡があったりする。「おっかねー」 スキーを脱いで通過する。後はさほど滑らない林道をひたすらひきずる。最後になってやっと滑った。パンザイ。でももう雪ないね……。

ひなびた村を歩いて温泉へ。汽車は丁度行ってしまふ。温泉は「は一天国」 次の電車さえもあきらめさせるパワーを持つ。温泉は偉大だ。結局夜行で帰ることになる。平岩の、ぼれ一食い物屋でカツ丼食ってから南小谷まで行き、夜行まで時間潰した。明日はバイトが待っている。(高橋記)

## 8951 前武尊～沖武尊山ST

3/11 青谷 額賀 高橋

「武尊って言ったっけ?」「そうそう、日帰りで行かない?」「んじゃ、先週に引き続き今回は前武、沖武へ前夜発日帰りスキーツアーと洒落込みますか!!」「はいじゃ決まりね」「てな軽い乗りで決まったんじゃなかったっけ?」「ともかく寝よ」「しかし、この沼田駅の待合室ってえの?けっこういいじゃん」「俺もう寝るよん」「あー!もうシュラフ出してやんの」「て、昨日の夜騒いでた割りには、良う寝れたじゃけん」「さっそくタクシーつかまえようぜ」「武尊へ、いざ行かん」「あ、シュラフやマットはイスの下にでも隠しておこうぜ」「大丈夫かなあ」「へーきへーき」「着いた、着いた」「うっわー、さみーの」「でも地面もろ見えじゃん」「客いないわけだよなあ」「よっしゃ、シール付けて早く行こうぜい!」「あ、たんま、便所」「あ、俺も、俺も」「早くしろよー」「わりーわりー」「んじゃ行こっか」「いやー日帰りカラ身パワーはすごい!」「あっ、と言う間も無くりフト上部だもんな」「しかしけっこう急な斜面だったな」「スキー外さなきゃ登れなかったもんな」「でも天気も上々!こっからはスキー付けてけるし、ピッチも上がるぜ」「よし行こ」「うっわー、この斜面滑り良さそう!」「がまん、がまん」「もうちょっとで頂上だし」

「おー、すげー」「もろ見えじゃん」「ドピーカンだしな」「360度」「陽射しがあちー」「さすが前武の頂上!」「いやー、いいね」「よーし、目指すは沖武!」「行くぞ」「にしても沖武とーいーなあ」「これって家の串だっけ」「トラバースで抜けるんだ」「ここはスキーで行けねーな」「ぐえー、つ、辛い」「沖武はまだまだ先か」「あーあ」「こっからはスキーで行けるぜ」「あれが中の岳か」「越えるぞ」「うー、沖武が見える」「最後のトラバースだ」「すっげーきうな斜面じゃん」「しかもクラストしてやんの」「行くか」「うー、滑りそ、落ちた——っ!!!」「と、止まらねー!」「やっつと、止まった」「うおおお、登り返しがサンタ・シンドーネ聖堂」「やっつと頂上直下だ」「スキーデポして行こか」「ごっ」

「うおおおおおおおおおおおっ!」「またまた360度」「風がつえーなあ」「谷川がかっこいいな」「目の前だもんな」「谷川を他の山から見たの初めてだ」「いっつもあそこだけ天気わりーもん」「さて下りるか」「シール外して」「3、2、1、GO!!」「げー、一瞬」「もう中の岳じゃん」「どんどん行こう」「あ、ここは外して下りないと」「この先は快調にとばせるな」「やっば下りはスキーにかぎるね」

「うおー、そろそろヤブが濃いな」「ツボ足にすっか」「このヤブ下りて川沿いに行きゃあ道路に出るさ」「お、林道だ」「あ、ちょうどバス来た」「ナイス・タイミング」「体はって止めろ!」「んな無茶な」「手ふってみっか」「お、止まってくれた」「それ乗り込め!」「スキーどこ置く?」「お客さん、床でいいっぺよお」「どんせ他の客さ、乗ってこんべえ」「あ、どーもー」「あー明日もバイトだー」「課題もあるー」「現実には引き戻されるなあ」「駅で何か食ってくか」「さんせー!」「てな具合にあの山行は幕を閉じたんだよな」「そーだっけー」「そーいやー駅で何食ったっけ」「かつ丼とビールだろ」「あ、そー、そー」「あの一、お客さま、そろそろレジ閉めさせてもらいたいのですが」「あ、会計ですか」「おれコーヒー」「あ、おれ紅茶だっけ、いくら?」「レスカ430円だよな」「あ、おれ、こまいのないからまとめて払うよ」「じゃ、よっしく」「カトレア閉まるのはえーよなあ」「次の山スキー、火打でいいよな」「あ、いいです」「登攀具いるんすか」「ピッケルだけでいいよ」「じゃ、また来週電話するから」「じゃ、また」「あ、中央線だよな」「そう、中野」「山スキーやらないんすか」「いやー金がなくて」「面白いのに」「じゃ、西高の春山のことでまた電話ください」「お、する」「それじゃ」「早川尾根か、うーん、楽しみだぜ」「さ、明日もバイトが待っている!」(高橋記)



都立西高W. V部活動報告

1987年度

山行名	期日	場所	3年	2年	1年	教員	西朋
新入生歓迎山行	4/23	大岳山	1	4	3	4	3 (林 武内 上野)
5月月例山行	5/23~24	乾徳山	0	4	4	1	1 (武内)
6月月例山行	6/13~14	七ツ石山~鷹ノ巣山	0	3	4	3	2 (上野 額賀)
夏山合宿	7/25~30	燕岳~笠ガ岳	0	2	4	2	2 (荻田 相沢)
沢登り	9/12~13	西丹沢 小川谷廊下	0	2	3	0	6 (河合 荻田 浜田 山田 吉田 鈴木)
11月月例山行	11/7~8	奥日光 前白根山	0	3	4	0	2 (西入 斎藤)
スキー合宿	12/25~30	戸隠スキー場	0	3	4	0	3 (吉田 荻田 中村)
1月月例山行	1/23~24	編笠山	0	3	4	0	1 (斎藤 西入)
2月月例山行	2/20~21	大菩薩	0	3	3	0	1 (斎藤 西入)
春山合宿	3/25~29	北八ガ岳	0	3	4	0	2 (上野 相沢)

1988年度

山行名	期日	場所	3年	2年	1年	教員	西朋
新入生歓迎山行	4/30	川苔山	1	4	2	3	5 (豊 沢 細 額賀 中村)
5月月例山行	5/21~22	雲取山	0	4	2	3	3 (中村 新倉)
6月月例山行	6/25~26	丹沢表尾根~鍋割山	0	4	1	1	2 (額賀 内倉)
夏山合宿	7/21~27	萊師岳~立山~剣岳	0	4	2	3	2 (内倉 中村)
沢登り	9/17~18	水無川本谷	0	4	2	0	4 (裕 鐘 豊 額賀)
11月月例山行	11/19~20	大菩薩	0	4	1	1	2 (武内 内倉)
スキー合宿	12/24~30	熊ノ湯	0	4	2	0	2 (斎藤 中村)
1月月例山行	1/21~22	入笠山	0	4	1	0	1 (額賀)
2月月例山行	2/18~19	男体山	0	3	1	0	2 (額賀 新倉)
春山合宿	3/31~4/5	北八ガ岳	0	4	1	0	1 (内倉)

都立西高W.V部活動報告

1989年度

山行名	期日	場所	3年	2年	1年	教員	西朋
新入生歓迎山行	4/23	三頭山	4	2	4	3	1 (笠原)
5月月例山行	5/27~28	乾徳山~黒金山	1	2	3	2	2 (内倉 高橋)
6月月例山行	7/1~2	丹沢 大倉嶽~鷲ノ尾~三峰	0	1	3	3	1 (中村)
夏山合宿	7/22~27	常念岳~槍ヶ岳	0	2	2	3	2 (内倉 高橋)
沢登り	9/9~10	奥秩父 東沢	0	1	3	0	2 (額賀 斎藤)
11月月例山行	11/18~19	三ツ峠山	0	2	4	1	1 (内倉)
スキー合宿	12/25~30	妙高池の平スキー場	0	2	3	0	1 (高橋)
1月月例山行	1/14~15	瑞牆山~金峰山	0	2	3	0	2 (斎藤 高橋)
2月月例山行	2/10~11	水ノ塔山	0	2	3	0	1 (高橋)
春山合宿	3/26~31	鳳凰三山~早川尾根	0	2	2	0	2 (額賀 高橋)

以上のような山行が実施された。ここ数年、山行の内容には変化はないが、西高生の部員の絶対数が少ないこと、同行する西朋の人数が少ないことが特長に挙げられる。後者については、会員の大学生が少ないこともあるが、万全を期すためには、1山行2名のOBの同行（特に九月以降）が必要である。（内倉記）



# 西朋登高会会則

## 第1章 名称・目的

第1条 本会は「西朋登高会」と称する。

第2条 本会はスポーツ精神を遵守し、会員相互の登山活動を協力して実戦すると共に、西高ワンダーフォーゲル部の指導にあたる。

第3条 本会の事務局は、毎年、総会において定める。

## 第2章 組織・会員

第4条 本会の会員は、西高ワンダーフォーゲル部に在籍したもの、または有志で、総会で承認を受けたものにより構成する。

第5条 本会には次の役員をおく。

1. 会長..... 会を代表し、事務局をおく。
2. チーフリーダー.. 山行全体を掌握する。
3. 学生リーダー.... 学生を中心とした山行を掌握する。
4. 会計..... 財政を管理する。
5. 装備..... 共同装備を管理する。
6. 記録..... 山行記録をまとめ、会報および西朋通信を発行する。
7. 西高係..... 西高ワンダーフォーゲル部を指導する。

第6条 前条の役員のうち、会長は総会にて選出し、他の役員は会長が指名する。

第7条 本会は4月に、会長が召集して総会を開く。

第8条 総会では、次のことを議事とする。

1. 前年度活動報告
2. 前年度会計報告
3. 新年度役員選出
4. 新年度活動計画
5. 新年度予算案
6. 新会員承認
7. 会の運営に必要な事項

第9条 本会は原則として毎月1会、チーフリーダーが召集して例会を開く。



第10条 例会では、次のことを議事とする。

1. 山行報告
2. 山行計画
3. 会の運営に必要な事項

第11条 本会は年1回、会員相互の親睦を図るため、西朋祭を行う。

第12条 本会には次の会員を置く。

1. 特別会員...西高ワンダーフォーゲル部の顧問を勤め、本会に大いに貢献した先生
2. 一般会員...会の活動に関心を持ち、合宿山行や、総会例会西朋祭などに参加する会員。(会報、西朋通信などを事務局より送付する)
3. OB 会員...現在は会の活動から遠ざかっているが、総会や西朋祭に参加できる会員。(総会などの連絡のみ事務局より送付する)

第13条 前条のOB 会員について、次の場合、一般会員より移行する。

1. 本人の希望による。
2. 5年以上連絡がない人は、総会での協議により、OB 会員とする。後に本人の希望により、一般会員に戻ることができる。

### 第3章 会費・会計

第14条 本会の運営のため、次のとおり会費を徴収する。

1. 一般会員...年額4000円
2. OB 会員...年額1000円(数年分前納できる)

第15条 一般会員のうち、合宿山行などに積極的に参加する会員からは、装備費を別途徴収する。

第16条 会計年度は、4月から翌年3月までとする。

第17条 会計は、普通会計と特別会計に分ける。

第18条 普通会計は、会費収入をあて、装備・会報発行・通信事務などに使う。

第19条 特別会計は、西高ワンダーフォーゲル部指導謝礼金および会費収入よりの積立金および寄付金をあて、遭難対策基金とする。

### 第4章 山行

第20条 本会は、次の合宿山行を持つ。

1. 新人合宿
2. 夏山合宿
3. 冬山合宿

第21条 会員は合宿山行の他に、各人の目的に応じて、個人山行を行う。

第22条 山行に前もって、計画をチーフリーダーに知らせる。

第23条 山行計画には、次のことを明記する。

1. 行程
2. 同行者
3. 最終下山予定日
4. 緊急連絡先
5. その他

第24条 山行後、山行報告を記録係に提出する。

## 第5章 西高ワンダーフォーゲル部の指導

第25条 本会は、西高ワンダーフォーゲル部が安全かつ意欲的な活動を実践できるよう、部の顧問教諭と協力して指導にあたる。

第26条 西高係は、顧問教諭およびワンダーフォーゲル部員と密接な連絡をとる。

## 第6章 装備

第27条 本会は共同装備を持ち、会員はこれを利用できる。

第28条 装備係は共同装備を管理する。

第29条 個人装備は各個人が負担する。

## 第7章 遭難対策

第30条 会員が遭難したときには、一致協力して救助に努力する。

第31条 積極的に山行している会員は、山岳保険に加入する。

第32条 山岳保険金の使途に関する権限は、本会が有する。

第33条 遭難が起きたときには、会に遭難対策本部を設置し、会長は必要な係を任命する。

第34条 遭難救助に要した経費は、山岳保険金をあて、不足分は当事者が負担する。

第35条 会の遭難対策基金は、当座必要な費用の立替に使う。

## 第8章 会則の修正・改正

第36条 この会則の修正や改正は、総会で議決する。

## 第9章 施行

第37条 この会則は、1986年8月30日の臨時総会で決定し、9月1日より施行する。

## 編集後記

本紙が発行されるまでに、非常に長い年月がかかったことは私の責任です。深くお詫び申し上げます。

西朋入会以来4年間、西朋における私の活動は必ずしも充実したものではないところは、自他ともに認めるところでありますが、会員の山行記録を編集することができ、光榮に思っています。それでも、私にとって「山」は大きな存在であり、登山のみならず様々な角度から山と深く接することができました。これからも、そうありたいものです。

担当の高橋君・新倉君、ご苦労様でした。

39期 内倉昌治

昨年の春には、出来上がっているはずの西朋24号が、何と一年も遅れてしまったのは、ひとえに編集を担当した私の怠慢にあったような気がします。けれども何とか、この様に西朋24号を作り上げることができました。山行に参加し、原稿を書いていただいた各会員の皆様、共に編集をした、内倉・高橋の両氏に、この場を借りて感謝いたします。

39期 新倉秀也

いろいろと、変な文を書いて申し訳ありません。しかし楽しんで貰えたのではないのでしょうか。やはり、この位の遊びがないと読んでいてもつまらないですよ。編集の方ご苦労様でした。

40期 高橋寛和

西朋24

1992年4月発行

発行者 西朋登高会 (会長 渡辺喜仁)

発行所 杉並区阿佐ヶ谷北5-9-13

渡辺喜仁付 西朋登高会

編集者 内倉昌治 新倉秀也 高橋寛和

印刷所 (株)サナエ